# とある力学の圧殺空間

asuta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある力学の圧殺空間

【Ｎコード】
Ｎ８８４６Ｖ

【作者名】
ａｓｕｔａ

【あらすじ】
学園都市の超能力者の第六位、阿頼耶家康は能力者嫌いにして学園都市最低最悪最強のスキルアウトのリーダー。そんな彼がスキルアウトとして学園都市で色々なトラブルを起こしていく！！
「俺を認めてくれるあいつ等が、威風堂々と歩ける。そんな学園都市がこの俺の夢なんだよ！！」
力学が暴走する時、物語も暴走する。

この物語の主人公は『とある結界術の渾沌世界』にも登場します。
是非ともそちらもお楽しみ下さい。

# プロローグ

無能力者狩り。

私の周りではそのような不健全な遊びが流行っております。内容は組織されたスキルアウト以外の無能力者（レベル0）の能力者を痛ぶるという遊びであり。そんな遊びをする理由というのが単純に自分の能力、大能力（レベル4）の念動力（テレキネシス）を存分に振るいたいからであって。

私の名前は赤川施門（あかがわしもん）。

今日も４人の仲間を引き連れて今日も楽しく無能力者狩りに励んでおった訳でございます。しかし、私はいくつかのミスを冒しました。一つはに私どもの溜まり場である第１９学区の廃工場に連れ込んだ七名の少年少女がスキルアウトの一員であったこと。彼等の所属しているスキルアウトの集団の名前が『チーム』であったこと。そして、

「てめェ等、俺んとこの舎弟（おとうと）にこんなことして許されると思ってんのか！？」

現在ブチギレ状態の学園都市最悪のスキルアウト『チーム』のリーダーと思われる男に吊るし上げられていること。しかも、この男質の悪いことに、私めの首を絞める力を落ちない程度に抑えているのでございます。

「てめェ等さ、聞いたことねぇ？スキルアウトでも、第七学区の駒場んとこと、黒妻んとこの『ビッグスパイダー』と、俺んとこの『チーム』にだけは手ぇ出すなって話し。坊や見たとこ、中学生みたいだから言っとくけど、これ学園都市の常識だかんね！？」

身長２ｍに届きそうな、茶髪の髪の毛先をピンクに染めた後ろ髪の長いチャラ男風味なスキルアウトのリーダーと見られる男性は私に

そうおっしゃいました。いやぁ～、目の下に施した悪魔の羽をイメージしたような刺青、スカイブルーのタンクトップ、大きな星？のペンダント、鯉がプリントされたブカブカなジーンズ、ゲコ太とかいうキャラクターものの健康サンダル。全てが素敵過ぎです！！

…じゃない。どうも首を絞められすぎて大夫思考が滅茶苦茶になってるみたいだ。念動力を使い、脱出を試みようにも首にかかる圧迫感の所為で、上手く演算が出来ません。他の仲間も、スキルアウトのリーダーに五秒もかからず全員ノックアウトされた為、助けを求めることは不可能です。よって私に出来ることはただ一つ。

「…お、御願し…ます。許して…下さい。」

首を絞められたことによって掠れた声で、私は命乞いを試みた。が、

「はぁ？何言ってんの？俺の仲間を傷付けておいて許されるわけねぇし。」

スキルアウトのリーダー様は吐き捨てられました。

「第一さ。俺、能力者ってさ、嫌いなんだよね。無能力者（一般ピーブル）を馬鹿にして、優等生（エリート）ぶってる感じ？ホントあれ見てるとさ、イライラしてくんだよね。」

にこやかな表情で仰られていますが、相当御怒りになっているのが分かります。

「つーかさ、能力を自分の才能、自分の実力って考えてる時点でアウトなワケよ。あんなモンは所詮学園都市のクソみてぇな研究者の人体実験紛いなことで手に入った産物であってさ、決して己の努力とか、挫折とかの過程（プロセス）を経てるワケじゃねぇワケじゃん？その辺ちゃんと理解して欲しいとこだよねぇ。」

と、スキルアウトのリーダー様は溜め息混じりに仰った。

「まぁ、無能力者狩りなんてゲスいことやってるヤロウになんざ、分かる筈ねぇか。」

と諦めたように寂しそうに笑い、私の首を絞める力を一気に強めた。

（…ヤバイ……死ぬかも…）

私の頭にその言葉が過ぎったその時、
「やめた。」
と萎えたように一言言って、スキルアウトのリーダー様は私の首から手を放した。
「えっ！？」
私は思わず、間抜けにも聞こえる声を漏らした。
「こんな弱い者イジメなんざしてたら、てめぇと同類になりそうだわ。だからやめてやる。」
そう仰って彼は地面に痰を吐き出しになった。そして、
「てめェは仲間を連れてこっから消えろ。今後絶対ェ俺に弱い者イジメなんざさせんな。」
と仰って私どもがリンチをして倒してしまったお仲間の方に歩み寄り、
「てめェ等、立てるか？」
と彼等の身を案じる言葉を投げかけた。すると、お仲間の一人が、
「め、面目ねぇ。兄貴。」
と仲間の一人が申し訳無さそうに言った。

あぁ。
なんて暖かな優しさ。
なんて爽やかな友情。
素晴らしい。

だが……

「甘ぇんだよ！！バァーカ！！」
そう嘲笑うように言って、俺様は右手をスキルアウトの能無し野郎

に向けた。「兄貴、後ろ！！」俺に気付いたスキルアウトの一人が叫ぶが、時既に遅しなんだよ、バァーカ！！いくらそのスキルアウトのリーダーが大能力者、強能力者を素手で、しかも四人同時に五秒で葬れる化け物だとしても、それを発揮させなきゃ意味がねぇんだよ、カス！！俺様はとっくの昔にそいつを逆さずりに１０ｍ程宙に浮かせて、脳天を地面に叩きつけて、頭蓋骨をグチョグチョにする演算をとっくに完成させてんだ、ボゥォケ！！と、俺様が勝ち誇った時だったー。

「えっ！？」

俺様は驚いた。右手がひしゃげていた。折れるでも、砕けるでも、潰れるでもなく、ひしゃげていた。それを知覚した瞬間、右手に痛みが爆発した。

「ウァァァァァァァァァァァァ！！！！」

手を押さえて、絶叫した。

何故？

どうして？

なんで？

どうやって？

同時に俺様の中にそんな疑問が駆け巡った。

「だから言っただろうが。『てめェは仲間を連れてこっから消えろ。今後絶対ェ俺に弱い者イジメなんざさせんな。』ってよ。」

スキルアウトのリーダーは億劫そうに首をコキコキと鳴らした。

「たっくよぉ。俺に能力を使わせんなや。嫌でも俺がクソと同類だつーのが、分かっちまうんだからよぉ。」

スキルアウトのリーダーはそう面倒くさそうに言った。

「てめぇ……スキルアウトの癖に能力者なのか！？」

俺様がそう尋ねるとスキルアウトのリーダーは、

「逆だ。能力者の癖にスキルアウトなんだよ。カスな能力者の中でもカス中のカスなレベル５の俺を認めてくれるヤツ等のリーダーに不覚にも収まっちまってんだよ。この俺はな。」

スキルアウトのリーダーはそう言った。
「…待て！！レベル５だと！？」
その言葉の中に俺様は不可解な言葉を見つけ、そう言うと
「あぁ。ムカつくことに、この俺は超能力者の第六位、『圧殺空間（プレッシャースペース）』の阿頼耶家康（あらやいえやす）だ。」
とスキルアウトのリーダー、阿頼耶家康は答えた。『圧殺空間』。
それがどんな力かは分からないが、戦力差はレベル４とレベル５では歴然である。
「……最初から、俺様の負け？」
「俺がどっかの超電磁砲（レールガン）みてぇに、能力見せたがりのしゃしゃりだったらな。」
俺様は絶望した。まさか、レベル４という高い能力を持っている優等生の俺様が最初から負けていたとは…
「……はははははは。」
虚無感を含んだ力の無い笑い声を上げた。
「まぁ、お喋りはこれでお終いだ。」
そう言って阿頼耶家康はその場で少し飛び跳ねて、助走をつけて俺様の顔に回し蹴りを食らわせようとした。

ここで俺様の記憶は途切れている。

そして、病院のベットの上で目覚め、無能力者狩りをしていたことがバレ、担任の教師が鬼の形相で俺様に停学処分の書類を渡してきたことは、絶対に忘れられない思い出であろう……

## プロローグ（後書き）

フィアンマ以外が俺様というとかなりダサいですね（笑）

## 第一話　圧殺空間（前書き）

第六位の能力者を描いた小説は数あれど、この第六位はワリと珍しいタイプかと思われます。

楽しんでください

# 第一話　圧殺空間

学園都市。
総人口２３０万人。
その約８割が学生という学生の街。
科学技術は学園都市の『外』と比べて、数十年先を行っている科学の街である。その科学力は超能力といういかにもオカルティックなものも作り上げた。この街というのは、学生に能力開発を行う実験施設のような街なのだ。だが、超能力といっても大したものではない。全体の約６割くらいは脳に電極やらを取りつけて、脳の血管が千切れる程の演算を行い、やっとスプーンを曲げられる程度のスペックなのだ。

これを無能力者（レベル0）という。

無能力者（レベル0）ー
この街の事情を知らないものが聞いても一体なんのことか分からないだろう。
これは簡単に言ってしまえば能力者の位置付けである。
無能力者（レベル0）の上が、日常で全く役に立たない低能力者（レベル1）、それに毛が生えた程度の異能力者（レベル2）、エリート扱いされ始める強能力者（レベル3）、軍事兵器（能力者が人であることを考えればこの言葉は倫理的に不適切かもしれない）としての価値が存在する大能力者（レベル4）、そして一人で軍隊を相手取れる学園都市に7人しかいない能力者としての最高レベル、超能力者（レベル5）ー

そんな超能力者の街で、小麦色の肌、全体的に筋肉質な体つき、２００？に届きそうな身長、毛先から３？くらいをピンクに染めた後

ろ髪が長い茶髪、切れ長の目の下に施した悪魔の羽を思わせるタトゥー、スカイブルーのタンクトップ、ヒトデにそのまま鎖を通したのではないかと疑ってしまうようなアクセサリー、鯉が描かれたフィット感に乏しいジーンズ、健康サンダルと、街中にいたら目立つような格好をした１８～２０歳くらいに見える青年は、

「暑ぃ～」

と、現在の気候に文句を言った。

この青年の名前は阿頼耶家康。

レベル５の序列第六位の能力者である。

これは、そんな彼の物語ー

「まっ、確かに暑いわな。７月入ってないわりに。」

紫のワイシャツに、黒のスラックス、赤いネクタイとシックにキメたファッションと不釣り合いな、ドレッドヘアーをポニーテールにした黒縁眼鏡の男が、隣を歩く、『学園都市限定！！ガリガリ君スイカ紅茶味』を口に咥え、右手に『黒豆コーラ』の５００ｍｌペットボトルが大量に入った袋を抱える家康に言った。

「夏本番入ったらどうなんだよ？これ。人体溶けるんじゃね？」

そう言って、家康は項垂れた。

「お前、本当にレベル５なのか？家康。地球の気温じゃ、人体が溶けるなんざまずあり得ねぇぞ。」

「バーカ。今のは比喩だよ、比喩。『人体が溶けるような暑さ』ってことだよ。まぁ、『～ようだ』が入るから、『直喩』だな。」

家康は見た目と、スキルアウト、学園都市の無能力者の不良少年が武装したギャングのリーダーという肩書きからは想像も付かないようなマトモな台詞を発した。

「てかさ、話変えるけど。」

「人を馬鹿とか言っといて、勝手に変えんな。んで、なんだ？」

ドレッドヘアーにポニーテールの男は家康に毒を吐きながら、尋ね

た。
「最近、5チャンで『絶対可憐チルドレン』って超能力者のアニメやってんじゃん？」
唐突にアニメの話をし出したスキルアウトのリーダー。
「やってるな、確かに。『スーパーニュース』と時間被るから見てねぇけど。」
ドレッドヘアー&ポニーテールの男は、どうでもいいと言いたげな白けた表情をした。
『絶対可憐チルドレン』
自分の記憶が正しければ確か、『外』製のテレビアニメで超能力が一般的に認可されてる21世紀の日本を舞台に、3人の能力者の少女が、能力者による犯罪を解決していく話だった筈だ。マニアックな側面が多い結構ヲタッキーなアニメだった筈だ。
（そんなアニメをスキルアウトのリーダーが見るってどうよ？なんつーか色々と駄目だろ…）
男はそう思った。
「んでよ、そのアニメの設定で能力者のレベルが7まであるんだわ。」
「あぁ。んで、それがどうした？」
家康の話にドレッドヘアー&ポニーテールは適当に相槌を打つ。
「これってあんま良くないと思うんだよね。」
家康のその言葉に
「はぁ？」
と意味が分からないとでも言いたげな表情になる。
「いや。冷静に考えろよリュウタ。学園都市の教育プログラムじゃ、能力者のレベルは5まで、その一個上の絶対能力者（レベル6）になれるヤツがいるかもなって言って教えてるわけじゃん？そこに、『能力者の最大はレベル7までです。』なんて語ってるアニメが現れたら、そっちの情報とこんがらがって覚え辛いじゃん？」
家康の言い分が意味不明過ぎて口をポカんと開けるリュウタと呼ば

れたドレッドヘアーポニーテール。
「つーか、あのアニメに出てくるレベル7って、結構大したことねぇんだよ。それをアニメを信じやすい小学校2・3年辺りが見てみ？『わぁ～レベル7大したことねぇw（ダブリュー）てか、これならレベル5とか余裕じゃん。てか、俺一方通行余裕で倒せんじゃね？』とか言って一方通行のカスに挑んだら、事件どこの騒ぎじゃねぇからな。マジで。」
大真面目にそんな馬鹿っぽいことを語る家康。
アイスを食べ終わり、口に咥えた棒を手に取って、それを表裏確認し、顔をしかめて「チッ。ハズレかよ。」と言って棒を地面に放る家康を見ながら、『リュウタ』は、
「はぁ～。」
と深いため息をついた。
「どうしたんだ？リュウタ？」
家康は心配そうにドレッドヘアーポニーテールの顔を覗きこむ。
「なぁ、ツッコんでも良いか？」
『リュウタ』は末期癌宣告でも受けたかのような深刻な面持ちで尋ねる。その言葉に家康は顔を赤らめて、
「え？……えっと……
リュウタなら……良いよ？」
と妙な色っぽい声で言った。
なんかツッコムのニュアンス変わっちゃうから！！
つーか、気持ち悪いから！！
てか、その妙な声の出し方どこで覚えたの！？
と、新たにツッコミたいことが増えたが取り合えずそれには触れないことにし、
「―スキルアウト《学園都市の教育の失敗作》が学園都市の教育がどうのこうの言ってんじゃねぇつかなんでスキルアウトの癖にヲタクなんだよいいかげんにしろてか俺の名前『リュウタ』じゃねぇし流田薫之丞（ながれだかおるのじょう）だから。」

とツッコミと言う名の悪口のマシンガンを家康に浴びせた。だが、
「てかさ、『リミッター』って学園都市にも出ねぇかな？俺、あれめっちゃ欲しいんだよね。」
家康には何一つとして響かなかった。
「……」
このリーダーの大物っぷりに流田は涙がでそうになった。
「どうした？リュウタ？なんか嫌なことでもあったか？」
しかも、やはり名前を間違える家康。
「いや。なんでもねぇよ。」
流れそうになる涙を抑えるのがやっとだった。
「てか、やべぇ！！時計見ろリュウタ！！」
この男は、本当に唐突に話しを変えやがる。そう思いながら、流田は自分の腕時計を確認する。
「……集合時間、とっくに過ぎてるな。」
スキルアウト集団、『チーム』のメンバーを集め、ここ第１９学区にある『ＲＵＮＤ１学園都市支店』にてボーリング大会を開くことを計画していたのだが、集合時間午前９：３０をおよそ３０分程超過していた。どうやら、コンビニでの買い出しに時間がかかり過ぎてしまったらしい。
「流石に『チーム』のリーダーとナンバー２が遅れるわけにはいかねぇよな。」
家康のその意見に、
「まぁ、そりゃそうだ。」
と同意する流田。考えてみれば、時間に遅れたのは目の前の約一名の馬鹿が、コンビニに並んでいた漫画雑誌を全て読破しようとしていた為のような気もするが、取り敢えず、ナンバー２の威厳を保つ為にもそんなことは気にせず、集合場所に急がなければいけない。
小走りを開始する家康に続くことにした。暫く進んで行くと、ブォーンという巨大なエンジン音を立てながら、二人の男が乗った、スクーターが猛スピードで２人の横を通り過ぎた。

「…あいつ等、二ケツでなんつースピード出してやがんだ？」
「まぁ、そういう冒険をしたいお年頃なんだろ。」
通り過ぎて行くバイクを見ながらそんな疑問を口にする家康に、流田はそう言う。と、その時
「誰か、あのバイク止めて下さい！！ひったくりです！！」
少女が叫ぶ声がした。流田は驚いて声のした方を向く。そこには、肩で息をしながら、地面に座り込む何処かの学校の制服を着た金髪、巻き毛の１５歳くらいの少女がいた。状況から察するに持っていたカバンか何かをさっきのバイクの男二人にひったくられ、それを追いかけたが、追いつけずに諦めたと言ったところだろうか。
「……全く。最近の若者は血気盛んですな。オッちゃんには、到底真似出来ませんぞ。」
冗談混じりにそう言う。だが、
「おい、どうした？」
いつになく、目の前のスキルアウトのリーダーは真剣な顔つきだった。
「捕まえる。」
家康のその言葉に、
「はぁ？お前何言ってんの？ただでさえ集合遅れそうだつーのに。」
と流田は呆れる。そんな彼に対して家康は、
「この子、匂わねぇ。だから能力者じゃねぇ。」
と一言一句はっきりとそう言った。力強く。
「だがあのバイクのヤツらは能力者だ！！能力者に無能力者が酷い目に合わされるなんざ間違いだ！！」
そうして、彼は手に持っていた、『黒豆コーラ』が大量に入ったビニール袋を投げ捨てる。
「よって、あいつ等はぶっ潰す！！！」
そう告げて、ニヤリとニヒルな笑みを浮かべ、家康は人とは思えない速さでバイクを追いかけて行った。その様子に流田も、地べたに尻をつけている少女も、呆然としていた。

「…ちっ。いつも思うが困ったリーダーだ。てか、ＡＩＭの匂いが分かる嗅覚ってどんだけだ。」
そう流田は面倒くさそうに、だがなんとなく嬉しそうに言った。
「……あとで、相馬達には謝っとくか。」
流田はそうボソッと呟き、その直後に顔に見た目に似合わない柔和な笑みを作り出しながら、カバンをひったくられた女子高生に近付き、
「すいません、お嬢さん。俺と家康がバックをここに持ってくるまで、そこにあるビニール袋を見張っててくれませんか？」
と言った。
「えっ！？はい……」
少女のその言葉を聞くと、
「では、よろしく。」
と告げて、家康と同じくらいの、常人には不可能な速度で走り出した。

「待てゴラァァァァ！！！」
家康は生物という枠組みからは到底外れた速度でバイクの２人組を追走した。
「おい、やべぇぞ！！誰だか知らねぇけどあり得ねぇ速度で追ってくるぞ！？」
バイクの後ろ側に座った右手にひったくったバックを持った、肥満気味の男が驚きの声を上げる。
「はぁん！？んなヤツ、さっさと追っ払えや！！てめぇ、強能力者（レベル3）だろうが！！」
バイクを運転するガリガリに痩せ細った男はウンザリとした調子でそう言った。
「ちっ！！」

肥満気味の男は舌打ちしてバックを肩にかけ、右手にソフトボール位の大きさの氷の球を作り出し、後ろから追走する青年の額に目掛けて投げつけた。パリーンという音を立てて、氷の球は粉砕し、家康の額からは滝のように血が滴落ちる。だが、家康は、
「痛えじゃねぇか……！！」
とニヤリと笑いながら、しかしドスのきいた声で何事も無かったかのようにそう言った。
「ひぃぃぃ！！」
肥満気味の男には、その表情が化物にでも見えたのか、悲鳴を上げながら、次々にてきとうな大きさの球を家康に向かって投げつける。だが、今度は家康に当たる前に、次々と球が砕け散る。
「んなクズダマ、この俺にきくと思ってんのかこのカス能力者ァァァ！！！」
そう叫びながら、家康はさらに走る速度を上げ、ついにはバイクの左側を並走する。
そして、
「や・っ・と・追・い・つ・い・た・ぜ！！！」
とさも愉快そうに言いながら、バイクを思い切り蹴り付けた。そのバイクはあり得ないことに、真っ二つになり中央分離帯まで飛び、景気の良い音を立てて爆発した。肥満気味の男は投げ出され、反対車線のガードレールにぶつかり、痩せた男は空中を二転、三転し、前方の地面に叩きつけられた。家康は肥満気味の男に近付き、
「さぁて！！さっさっとバックを返して、あの子に謝って貰わねぇとなぁ！！」
家康は怒りに満ちた笑みを浮かべながらそう言った。
「…なんで、こんなことされなきゃならねぇ。」
「あん？」
肥満気味の男の発言に家康は顔をピクリと引きつらせる。
「ただ、レベル０から物奪っただけなのに…」
子供の言い訳のような言葉。

「なんでこんなことされなきゃならないんだぁ！！」
八つ当たり気味に、肥満気味の男は手に作り出した氷柱を家康の喉仏に突き刺さそうとした。だが、
「……ざけんな。」
そう一言、怒りに満ちたドス黒さを含んだ声で呟く、家康の怒りに呼応するように肥満気味の男の腕は潰れた。
「ギャァァァァァ！！！」
断末魔のような声を上げる肥満気味の男の胸倉を掴み、
「ふざけんじゃねぇぞ！！てめェ、レベル０にならなんでもやって良いみてぇに言いやがって！！」
と恐ろしいまでの剣幕で怒鳴った。
「てめェみてぇなクソな能力者のせいで、俺の大好きなヤツ等が惨めな思いをすんだよ！！俺みてぇなクソを認めてくれるヤツ等がいちいち傷つくんだよ！！」
スキルアウトのリーダーは心を憤怒の一色に染め上げた。
「良いか？俺はてめェみてぇなクソ能力者が……」
そう言いかけた時だった。
「バイクの恨みぃぃぃぃ！！！！」
そう叫ぶ声に家康は振り返った。すると、痩せた男の方が、自分に雷撃を放っているではないか。しかし、驚いたのはそこではなかった。
「ヒーローの説教の時に攻撃するなんて、てめぇら美学の欠片もないねぇ。」
痩せた男を嘲る、『チーム』のナンバー２がそこにいたからだ。
「…ピンチに駆けつけてやったぜ。リーダー。」
「ピンチでもなんでもねぇよ。リュウタ。んな電撃、普通に防げるから。」
カッコつけた発言をするドレッドポニーテールの青年に、家康は強がりでもなんでもなくそう言った。
「こういう場面は、ナンバー２の顔を立てるモンなんだよ。あと、

俺は流田薫之丞様だ。」
名前の間違えを律儀に訂正しながら、妙な常識を語る流田。そんな流田を見て、
「馬鹿な！？何故俺の力がきかねぇ！？俺はレベル３の電撃使い（エレクトロマスター）だぞ！？」
と一人驚く痩せた男。
「へぇ、てめぇレベル３なのか。すげぇな。」
流田はワザとらしく驚き、
「だが、俺の能力は『雷撃暴風（ドゥンナーシュトゥルム）』。電撃使いじゃ、常盤台のエースの次に強え、レベル４の力なんだよ。てめぇじゃ勝てねぇ。」
と吐き捨てた。
「れ、レベル４だと！？」
衝撃を受ける痩せた男に流田は、
「んなことで驚くなよ。あっちの大男は、レベル５の第六位。『長点上機の歌舞伎者』こと、『圧殺空間（プレッシャースペース）』の阿頼耶家康なんだぜ？」
とさらに衝撃の事実を突きつける。

「レベル５…六位…」
肥満気味の男は体を恐怖でビクビクと震わせた。
「そうだ。ムカつくことに、俺は圧力を操作できるレベル５だ。」
家康はただイライラとそう言った。
「圧力…？」
「そう。圧力。こいつで俺は空気圧を操って、最新鋭の駆動鎧（パワードスーツ）を角砂糖にすることも、地面を踏みつける圧力を強めて、その反作用で高速移動をすることも、圧電気を起こしてレベル３の電撃使い並の電撃を放つことも、逆に電気抵抗を生み出すこともなんでもござれだ。」
ウンザリと、本当に自分の能力を毛嫌いしてるように家康は言う。
「あぁ。そうそう。てめぇの顔面をぶん殴る時にかかる圧力を変え

りゃ、頭蓋を粉微塵にすることも出来るな。」

「さてと。てめぇには、『電撃暴風』の7億ボルトの電撃を見せてやろう。」
そう言って流田はかけていた眼鏡を胸ポケットに引っ掛けて、左腕を振りかぶる。
「ひぃぃぃぃ！！」
痩せた男は全速力で逃げ出した。

「てめぇには、病院を出た後、能力者（クズ）がとうやって無能力者（一般ピープル）と触れ合うべきか教えてやる。」
家康はそう言って右手を、鉄よりも硬く握り込み「だから」と人呼吸おき
「一旦地獄までやり直せ、この五流ヤロウ！！」
と言って思い切り腕を振りかぶる。

「消し飛べゴラァァァァァ！！！」
家康と流田の声は重なり合い、それぞれの一撃は鉄槌を下すべきクズをズタズタにした。

……取り合えず二人はそれぞれ死なない程度に威力を抑えた。

「はぁ。ボーリング、すっかり遅れちまったな。あいつ等、今から行っても怒んねぇかな？」
家康は項垂れる。
すると、
「大丈夫だろ。」
と流田は断言した。
「なんで？」
家康が尋ねると、
「……んなもん、あいつ等がてめぇをリーダーとして信頼してるからに決まってんだろうが。」
流田は少し恥ずかしそうに言った。すると、
「そうか。」
と言って、家康は輝かしいまでの満面の笑みを浮かべた。
「さて。さっさとバック返しに行って、ボーリングと洒落込むとしようぜ。」
流田はそう言って少女が待っているであろう方向に歩き出した。
「…だな。」
家康も流田に続いて、手に、少女のバックを掴んで歩き出した。

## 第一話　圧殺空間（後書き）

登場人物紹介

阿頼耶家康（あらやいえやす）

ＣＶ　小野大輔

能力名　圧殺空間（プレッシャースペース）

圧力を操る力　以外に汎用性が高く、電気を起こす、抵抗を作る、液体を常温で沸騰させるなど色々なことができる。

あることがきっかけで能力者嫌い　能力者は匂いで分かるらしい

現在、スキルアウト『チーム』のリーダーである

レベル５の癖にスキルアウトのリーダーなのは後々説明します

フルネームは「人間の根本的な部分で凄いヤツ」という意味があります

こういう二次小説で書かれるオリキャラは孤児だったり、両親が死んでる場合が多いですが、両親は健在です

流田薫之丞

ＣＶ　吉野裕之

能力名　雷撃暴風（ドゥンナーシュトゥルム）

御坂美琴の次に強い電撃使い

どちらかというとインテリさん。
レベル５の癖に、頭の足りないリーダーの保佐をするナンバー２。
好きな言語はドイツ語。
そのため能力名もドイツ語。

レベルの高い能力者なのにスキルアウトなのは後々明かします

名前のモチーフは「ｏｎｌｙ　ｍｙ　ｒａｉｌｇｕｎ」のカバーで有名なあの人。
見た目のモチーフはイナズマジャパンの某司令塔。

## 第2話　探眈求究（前書き）

やっと三話目です（ー＿ー；）

## 第2話　探耽求究

スキルアウト『チーム』のアジト。
それは決して廃ビルや、廃工場等といった、人から必要となくなったような、安っぽいものではない。
第１９学区の7階建ての、飲食店や美容室、果ては学園都市の男性教員や男性研究者向けに作られた飲み屋等が入った雑居ビルの五階。
一見するとオシャレな居酒屋にも見える、３０人くらい平気で入れそうなこの場所が『チーム』のアジトなのだ。
炭酸飲料等のジュースや、ワインやビール等の酒、スナック菓子やおつまみ等が、某暴飲暴食シスターの手が及んでも、４、５日くらいはもちそうな程保存されており、冷暖房、カラオケボックス完備のスキルアウトのアジトとは思えないような快適空間である。こんな設備が作れるのも、リーダーがレベル5、ナンバー2がレベル４でもトップクラスの能力者であり、総勢２３人の下っ端が日々、カツアゲやひったくり、ＡＴＭ強奪や銀行強盗等に真面目に勤しんでいるお陰である。

そんなアジトの奥にある個室。
ベットとテレビが一つずつ置いてあるだけの部屋。
そこで『チーム』のリーダー、阿頼耶家康は目を覚ました。時計を見れば時刻は午後１：１７。長点上機学園３年生という彼の立場からすれば完全に遅刻であるが、慌てる必要はない。何故ならば、彼の登校日は週三日しかなく、今日は登校日ではないからだ。それが許されるのも、彼が学園都市に7人しかいないレベル5の能力者という立場と、スキルアウトらしい暴力を利用して長点上機学園の理事長を脅しにかけたからである。
「ふぁ～。」
欠伸をしながら、家康は伸びをする。ちなみに現在彼は『笑ってい

いとも！！』が始まる時間に起きれなかったことを全力で後悔している。
「ちょいと寝過ごしちまったな。」
家康は後悔した。ちなみに採算注意をしておくが、彼は長点上機学園の三年生。双子座の１８歳。普通なら『ちょいと』では済まない寝過ごし方である。

彼は頭をポリポリと掻くと、腹の虫が悲鳴を上げていることに気付いた。
「……コンビニ行くか。」
家康はそう呟いてベッドから起き上がった。

ここは第七学区の地下街予定地。
８月半ばまでの着工を目指し、早朝５：００から始まった作業にも、遅過ぎる昼休みが訪れた。
「最近物騒っすよねぇ～。」
『チーム』のメンバーにして、とある不幸な男子高校生の通う学校の不登校問題児として名高い、フリーター・相馬金太郎はトラックの荷台に座り、カップラーメンをすすりながら、自分の向かい側に座るバイト先の上司に当たる、パンチパーマに無精髭のヤクザのような男に世間話しを振った。
「不良（ヤンキー）がそれを言うのは間違いだと思うぞ。」
パンチパーマの男はご尤もなことを言いながら、おにぎりを頬張った。
「物騒なモンは物騒なんだから、しょうがないじゃないっすか。それに、俺はヤンキーじゃなくて、スキルアウトっす。」
相馬はパンチパーマの男の言葉を訂正しながら?をすする。
「どっちもあんま大差ねぇだろうが。」
と反論しながら、水筒に淹れた味噌汁を飲む。

「というかよ、お前物騒物騒って何が物騒だっってんだよ？」
男は尋ねた。
「量子力変化（シンクロトロン）の事件っすよ。」
「あぁ、そういやなんか言ってたな。第七学区で小学生と風紀委員（ジャッジメント）の女の子が大怪我したって。」
相馬の言葉で男はその事件について思い出すことができた。
「はい、そうっす。『7月1日午後3：30。ファストフード店の近くにて小学校の女子児童に道案内をしていた風紀委員の女子中学生が突如起きた爆発によって、重軽傷を負った。原因はレベル4の量子量変化による、能力行使。現場検証によれば、犯人は、アルミ缶を起点に爆発を起こしたようだ。』っていう事件っす。」
「おまっ！？やけに詳しいな。まさか犯人か！？」
詳しく事件の内容を説明する相馬に、男は疑いをかけた。
「違うっす。ノリたんの日記に書いてあったんすよ。」
そう言って相馬は、箸を一旦休め、携帯を操作して画面にあるものを表示した。
「『能里のゆったり事件報告』！？なんだこりゃ！？」」
それを見せられた男はそれを読んで驚きの声を漏らした。携帯の画面に表示されていたのは、苺があちこちに装飾されたファンシーな柄のブログのトップ画面だった。
「『能里香（のりか）＝ウェイル＝ロックゲート』ちゃんのブログっす。アクセス数は学園都市一。レベル0なのに、学園都市の平和を守る風紀委員として日々努力してる健気な女の子っすよ。しかも可愛い。」
今度はプロフィールの画面を見せて言った。そこには、ウェーブのかかった金髪にライトグリーンの垂れ目の少女の写真があった。確かに可愛らしい少女ではあるが…
「なぁ、相馬。事件の内容ってブログに載ってたんだよな？」
男が尋ねると、
「そうっす。ノリたんは、日記に自分が関わった事件のことをよく書き込むんす。」

と相馬は答えた。
「それってダメだろ。風紀委員として。」
男は、触れてはいけないことに触れてしまった。暫しの沈黙が流れ、男がむしゃむしゃとおにぎりを咀嚼する音が流れた。
「にしても、酷い事件っすよね～。」
相馬は脱線した話しを元に戻した。
「まぁ、上位の能力者が人を傷つける人間だって思っちまうと、この街も安心出来んなぁ。」
「俺が言いたいことはそうじゃねぇっす。」
「？」
男が世間一般的な意見を述べると相馬はそう反論した。
「きっと、傷ついたのが風紀委員みてぇな上位（エリート）の能力者だけだったら、こんな学園都市にありがちな事件、興味も持たんかったっす。でも、実際はこの事件、無能力者の小学生が被害にあってるんす。」
相馬はここまでは笑顔だった。
「でもこんなんじゃ駄目なんすよ！！」
相馬は何かにとりつかれたような恐ろし気な、寒気のするような声でそう言い、手に持ったカップラーメンの容器を握り潰した。汁や残った？や具が、手にベトベトとこびりついた。
「こんなんじゃねぇんだ…！！俺ら『チーム』が、リーダーの目指してる学園都市ってのはそんなんじゃねぇんだ…！！」
男は怖じけた。目の前にいるのは、自分の知る相馬ではなかった。
「『無能力者にとっては安全で、能力者にとっては地獄より危険な場所』。それを作んのが『チーム』の最終目標であり、流田さんがリーダーの時からのルールだろうが！！」
ただの狂気。男が相馬に見出したのはそれであった。
「今一度思い出せ……『銀の海星』に誓ったことを…」
ぶつぶつと呟きながら、工事現場の砂ぼこりで汚れた、ライトグレーに染めた男としては長いように思われる髪を束ねる、星の装飾が施された少女向けのヘアゴムを解いた。それを見つめ、パンチパー

マの男が明るいと認識している相馬の性格からは予測も出来ないような狂った笑みを浮かべた。
「……ぶっ殺すんだろうが。…俺に痛みを与えた能力者どもをよぉ。」
「相馬。」
「……あんなヤツら絶対許せねぇ。…てか、許しちゃ駄目だ。」
「相馬。」
「……そうだ。…ダチの為にも、この街から能力者は駆逐しねぇと。」
「相馬。」
男が何度も呼びかけても相馬は呪詛を吐き続けた。男はこの相馬を見ていられなかった。だから、思い切り腹に空気を集め、
「ソウマ！！！！！」
と彼の名を叫んだ。すると相馬は、
「どうしたんすか？」
と何事もなかったかのような笑顔を作った。
「・・・何でもねえ。」
自分に見せた狂気が嘘であるかのような相馬に男は戸惑った。
「何でもねえなら、とっとと仕事に戻りましょうや。そろそろ休憩も終わりますし。」
「お、おう・・・！」
そう言って立ち上がり、髪を結び直しトラックの荷台から降りてさっさと工事現場に向かおうする相馬に、男は続いた。
「すいません。ちょっと良いかな？」
そんな彼らの前に一人の少女が立ちふさがった。金色に染めた巻き毛をした、どこか気品を感じさせる、ダブルボタンのブレザーを着た少女が立ちふさがった。
「なんすか？」
相馬が爽やかな笑顔尋ねると少女は、
「アナタは『チーム』のメンバーの人？」

と聞いた。
「そうっすけど、それが何か？」
相馬は面倒臭そうに答えた。こんな少女に、相馬は心当たりがない。
（きっとメンバーの誰かが、何かやらかしたんだろ…
一体誰なんすか、人のバイト先に面倒ごとを運んでくれたお馬鹿さんは…）
心の中で毒を吐く相馬であったが、少女の
「『チーム』のリーダーに会わせてくれませんか？」
という一言に、ズゴーと、まるでコントのようにずっこけた。
「リーダー……何してんですか……」
相馬は脱力した。

「ハクション！！」
アジトの寝室にて食事中のチームのリーダーは大きなくしゃみをした。
「…あぁくそっ！！風邪でもひいたか？」
そう忌々しそうに呟きながら、家康は食い途中のカップ焼きそばを一気に頬張った。ちなみに『ペヤング』である。
「まっ、大丈夫だろ。風邪なんざひいたこたァねぇし。」
そう楽観的な結論を出し、
「それよりも、まずは食後の楽しみだな。」
と楽しげな歌うような口調で良いながら、コンビニの袋を取り出した。そこに入っていたのは『黒豆コーラ』５本。家康は元来この飲み物が好きだが、楽しみというのは別の理由である。コーラの蓋に取り付けられた、中身が全く見えない黄緑色の袋。これが『楽しみ』の理由である。
「まさか、『黒豆コーラ』と『電撃文庫』がコラボするなんてな。ガチでビビったぜ。」

『黒豆コーラ』に『電撃文庫』のキャラクターのストラップがついているのだ。中身は開けてみるまで分からない。収録キャラクターおよそ１２００種類。（学園都市のメーカーも無茶をするものだと、家康は率直に思った。）

「『杏里ちゃん』が出れば儲けモンだな。」

家康が言う『杏里ちゃん』とは、眼鏡に豊満な胸が特徴の『デュララ！！』という小説に出てくる登場人物である。もっとも、そのキャラクターを好きな理由は、現在彼が好きな女性が眼鏡の似合う美人という理由だけである。

「さてと。まずは一本目。」

家康は一本目のコーラについていた袋を開ける。すると、そこに入っていたのは

「『エルメス』か。一本目から中々良い感じじゃね？」

『キノの旅』に出てくる主人公の相棒である喋るバイクである。彼はそれを床に置き、次のペットボトルの袋を開けた。

「『黒猫』か…」

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』の登場人物のストラップを置き、さらに次の袋も開ける。

「『空目恭一』……結構前の作品も収録されてんのか…」

『Ｍｉｓｓｉｎｇ』という物語終了から、相当の時間がたっている小説の主人公もレパートリーの中に入っていたことに驚く家康。４本目のボトルについている袋もあけた。

「くっそう！！『静雄』か！！同じ作品のキャラだけど…おっしい！！」

家康は『平和島静雄』のストラップが出たことで、喜んでいるのだが、悔しがっているのだかよく分からないテンションになった。

「最後の一袋・・・こいつだけであてられるか？」

家康の緊張が最高潮に達した。額に脂汗をじっとりとかき、息が詰まり、生唾をゴクリと飲み込む。

「勝負は……一瞬っ！！」

家康は意を決して袋を破いた。そして、中身を確認すると、
「ふざけんなぁぁぁぁぁぁ！！！」
黒豆コーラを壁に思い切り投げつけた。あり得ないことに、黒豆コーラの入ったペットボトルは水風船のようにはじけた。能力は使っていない。そもそも家康は、よほどのことがない限り、レベル４以上の能力者を相手にする戦闘以外で能力を使わない。つまり黒豆コーラが破裂したのは、家康が腕力のみで成したことなのだ。
「『探眈求究』って……『探眈求究』ってどういうことだぁぁぁ！！！」
そんな怪物が怒っている理由。
それは、最後のペットボトルについていたストラップが原因である。

『探眈求究』とは『灼眼のシャナ』という小説に登場するキャラクターである。白髪眼鏡のマッドサイエンティストで、はっきり言ってこのオマケに収録されている理由が全くもって分からない程のモブキャラなのだ。家康は、オマケの手応えから、『園崎杏里』のストラップを当てられると期待していた。だが、実際はこの体たらく。前の４つがなかなか良いものであったため、気分も相当落ちる。
「はぁ・・・・・・」
がくりと肩を落とし、溜め息をついた。
その脱力した姿からは、「もう今日は何もするきしねぇ」という、家康の心情が伝わってくるようだった。
と、彼の耳に独特な音程の女性の歌が届いた。彼がメールの受信音に設定している『宝野アリカ』の『聖少女領域』である。
彼は、チョークのようにも見える、学園都市製の携帯を確認すると、
「……んだ、相馬か。」
『チーム』のメンバーの一人からメールが入っていた。一応内容を確認すると、
「……」
彼は黙り込んだ。そして、立ち上がり、枕元に置いた『チーム』の

シンボル『銀の海星』が鎖で繋がれたアクセサリーを首にかけ、携帯をジーンズのポケットの中にしまい、そして部屋の窓を開けて雑居ビルの隣の駐車場に飛び降りた。
「ざけんじゃねぇぞォォォォ！！！」
駐車場に降り立った、家康は怒りの咆哮を上げた。そして、彼は駐車場に建てられた看板に鎖で繋がれた怪物をそれを戒めるものを引きちぎり、解放した。それは、家康の愛車。二輪の悪魔、『セグウェイ』ある。

不良の乗り物といえばバイクであり、それは学園都市でも変わらない。
にも関わらず、『チーム』のリーダー阿頼耶家康の乗り物は『セグウェイ』。
少しイメージがふやけてしまうかもしれない。

だが、この『セグウェイ』は、名実共に二輪の悪魔であった。
Ｆ１を遥かに抜き出しそうな速度で、猛禽類の鳴き声のような甲高い風切り音と、爆撃にも似たエンジン音をあげながら、悪魔は『化物』を乗せながらスタンピードする。

道行く人々は振り返る。
それはそうだ。
１９９ｃｍの体躯を持つ男が、あり得ない速度で爆走する『セグウェイ』に乗っている等、人に話せば嘘だとおもわれてしまう出来事が目の前で起こっているのだから。
家康はそれを気にも止めない。メールに書かれた文章が、家康からそれをさせる余裕を奪っていたからだ。

『バイト先、助けに来て下さい』

端的に書かれたその文章が、相馬の置かれている状態が普通ではないことを表していた。
文から察するに彼のバイト先とその周辺で何かが起こったということになる筈だ。
彼の腕っぷしを持ってしても勝てないような高レベルの能力者に襲われたのか、それとも凶悪な兵器で武装した同業者（スキルアウト）か―。
嫌な想像はいくらでも頭を過ぎった。

「待ってろ、相馬ァァァァァ！！」

夏を迎えた学園都市に家康の叫び声が響いた。

## 第2話　探耽求究（後書き）

阿頼耶家康「まぁ、俺やチームのメンバーに聞きたいことがあったら、何でも聞け。答えられる限り答えてやらぁ！！」

薫之丞「まっ、こんなリーダーだがこれからもよろしく頼むわ。つーことで感想よろ～。」

## 行間？　生徒会長（前書き）

行間を出すには早すぎると思いますがすいません

最近ギャグが多いのでシリアスが書きたかったんです（~ ―~ ；）

## 行間？　生徒会長

学園都市の第一学区にある、アメリカの国防総省（ペンタゴン）本部を彷彿とさせる建物の地下１０００ｍに広がる空間。その場所に名をつけるとしたら『世界の図書館』であろう。円柱状に繰り抜かれた空間の壁と呼べる部分は、地下２００ｍ地点から隙間なく本が敷き詰められ、その場所の唯一の住人である人物がそれを取れるよう、螺旋階段が取り付けられていたのだ。その場所に至るには、１００桁のパスワードを１２００通りと２０種類の鍵で守られた厚さ５０ｃｍ、２０ｔの扉を開け、そこへの直通のエレベーターを使わなければならない。学園都市の統括理事長の住まう、『窓のないビル』のように『空間移動』で進入すれば、内部に設置された６万機のＡＩＭジャマーの餌食となり、一生囚われるという寸法である。そんなこの世から隔絶された空間にいたのは二人の少年であった。一人は黒髪をオールバックにした、銀縁眼鏡の生真面目そうな燕尾服のように見える制服を着た背の高い、実年齢よりも年上に見られそうな１５歳の少年。そして、もう一人はその眼鏡の少年とは正反対であった。。身長は１５０ｃｍに届いておらず、顔だちは小動物のようで、実際は眼鏡の少年と同じ年齢であるのに、それよりも遥かに幼く見えていた。黒い乱れた髪には、清潔感がなく、目の下には深い隈がある。着ているのは、あまり珍しくもない形状の学ランの上下、インナーにはどこぞの第一位が好んで着ているブランドの、橙色のＴシャツ。そして、

学ランの右袖に腕章をつけていた。

『生徒会長』と書かれた腕章を－

そんな童顔の少年は、本が乱雑にの散らばった床に座り、科学の街である学園都市にはあまりに不釣り合いな本を読んでいた。

「何故そんな本を読んでおられるのですか？生徒会長（ジャスティス）様。」

眼鏡の少年は立っている為、必然的に童顔の少年を見下ろすような

形で、そう尋ねた。『生徒会長』と呼ばれた少年が読んでいた物。
それは旧約聖書だった。それを読んでいた『生徒会長』は、顔を上げ、
「この世界を作った神様っていうのが、どれほど不完全なのかっていうのを、再確認するためカナ？」
と眼鏡の少年に微笑みを向ける。
「貴方は神の存在を信じていらっしゃるのですか？」
眼鏡の少年は尋ねる。
「信じてる。信じていなきゃ、ボクの身に起こった不条理を説明なんて出来ないモノ。」
『生徒会長』は自嘲的に笑った。
「どういうことですか？普通であれば、人は不条理に逢えば逢う程、神の存在を否定するものでは？」
もっともらしい眼鏡の少年の意見。そんな意見を述べる少年に対し、
「カナタ、キミ聖書読んだことナイ？」
と『生徒会長』は尋ねた。
「生憎と、無神論者なので。」
そんな『カナタ』と呼ばれた少年の言葉に「相変わらず硬いナ～」と『生徒会長』はクスリと微笑した。
「……聖書の世界ではね、神様って結構ミスってるんダネ。旧約の創世記のたった１０ページの間でも神様って人は、『たった７日間で世界を構築してしまった』、『アダムとエバが食べてはいけない果実をエデンの園にワザワザ置いてしまった』という二つのミスを冒しているんダヨ。」
『生徒会長』はそう言う。
「俄か者がこんな事を申して、非常に失礼であると思いますが、何故『７日で世界を作ったこと』が過失であるとお思いに？」
『カナタ』は意見した。それに対し『生徒会長』は苦笑すると、
「例えばさ、神様がせめて３０日かけてればもっと自分の望みに適った世界になってた、って思わナイ？」

と一つの考えを投げかけた。
「神様があと一日長く時間をかけていれば、飢えに苦しむ人達はそれで苦しむことは無かったかもしれナイ。あと１３日かけてれば戦争のない平和な世界に、あと２０日かけてれば超能力のない世界に、また６０日かければ学園都市がない世界に、また１００日かれば……」
少年は太陽に手を伸ばし、神に近づかんとするかのように天井に手を伸ばし、
「アレイスターなんていう気狂いは生まれず、ボクは優しい両親や、人生の道しるべをくれる恩師、沢山の明るい友達に囲まれた普通の男の子だったかもしれナイ……。」
何かを掴むように手を握った。もっとも、手からは虚しい空間がすり抜けていくだけだった。
「もちろんこんなものはｉｆに過ぎないとは分かっているけど、それでも神様が愚かしく思えてしまうんダヨ。」
『生徒会長』はそう言い、「さて」と呟いて聖書をぱたりと閉じた。そして、彼は「カナタ」の顔を真っ直ぐ見つめ、
「だから、ボクは神頼みをやめて自分で行動を開始した。スタートは確かにキミ達、風紀委員長（ロウガーディアン）がボクを必要としたことだけどネ。」
と話しだした。
「はい。左様でございます。」
カナタはそう言う。
「まぁ、キミ達の計画の延長戦上にボクの計画はあるのだけどネ。それで、その計画なんだけど、結局何をするんダイ？」
『生徒会長』は尋ねた。
「面白い計画を用意致しましたよ。」
「へぇ。それはどんな計画ナノ？」
カナタは尋ねられると、
「超能力者（レベル５）達の抹殺です。」
と言い、その鉄面皮に似合わない気味の悪い笑みを浮かべた。

「私達５人の標的は第七位、第六位、第四位、第二位の４名でございます。そして……」
「キミたちが標的を倒し次第、ボクが第一位を殺す。」
言うことが始めからから分かっていたような口振りで言った。
「単純明快な作戦で良いネ。しかも、キミ達の目的を達成には確実な作戦ダ。」
そう言ってあまりにも危険な作戦とはまるで正反対な穏やかな笑みを浮かべた。それにあわせ、カナタは笑おうとするが、
「だけどその計画、乗るには少し条件があるナ。」
その言葉に顔をしかめた。
「そんな顔しなくて良いヨ。」
『生徒会長』は優しい微笑みを浮かべる。
「では、私は何を…」
「その堅苦しい言葉は辞めて、ボクのことを、『生徒会長』じゃなくて、名前で呼んでヨ。」
「なっ！？」
『生徒会長』の要求に顔を真っ赤にするカナタ。
「駄目なの？」
目を潤ませる『生徒会長』から、目を背け
「は、恥ずかしながら、この口調は我が『永海執事養成専門高校』において義務付けられているもので…そもそも、何故私より立場が上な貴方の名を呼ばなければ…」
と少し慌てた感じでそう言う。そんな彼の挙動に微笑すると、
「そんなの単純ダヨ。ボクはね、キミとも他の風紀委員長のミンナとも、上司と部下でなくて、友達として接したいんダヨ。」
と言った。
「ボクはここにずっと閉じ込められてて、友達がいなかったから…だから、キミ達と友達になりたいんだよ。」
そう言った『生徒会長』の表情はとても悲しげであった。彼が発現した能力。それによって彼が、学園統括理事長によって与えられた

役割があった。全てはそれのせいだ。それの所為で彼は5歳から17歳までの12年間、隔世の世界に閉じ込められ続けた。それによって与えられた悲しみ、怒り、孤独は、きっと時雨沢彼方(しぐさわかなた)にとっては計り知れないことだろう。もしも、それを晴らすことが出来るのなら、

「分かりました。仰せのままに。奈栗(なくる)。」

何度でも、何度でも、麒麟柄奈栗(きりんづかなくる)の名前を呼び続けようと誓った。

名前を呼び、自分の前に、執事の如く跪く奈栗に、

「やっぱり、キミは堅苦しいヨ。」

と笑った。

夏の始め。

学園都市という名の歪んだ街は、さらに歪みつつあったー

## 行間？　生徒会長（後書き）

ちなみに、この物語の第一章は、
アニメで表すなら
ｏｐ　ｔｈｅ　Ｇａｚｅｔ　Ｅ　『Ｓｈｉｖｅｒ』
ｅｄ　小野大輔　保志総一郎　高山みなみ　岡本信彦　で『ｓｅｃｒｅｔ　ｖａｓｓ～君がくれたこと～』
となっています。

ちなみにｅｄは全員レベル５の声優（私の妄想です）
一方さん以外を予測してみよう！！

今回出てきた二人の細かい情報はネタバレになるので、今回は書きません

声優だけなら、
麒麟柄奈栗が水樹奈々
時雨沢彼方が櫻井孝弘です

## 第三話　一方通行（前書き）

このタイトルは釣りではない。
それだけは言いたい。

# 第三話　一方通行

百鬼夜行（カーニバル）。
スキルアウト『チーム』のリーダー、阿頼耶家康が搭乗するモンスターセグウェイの俗称である。もっとも、これを制作したのは、家康本人ではない。彼の飲み仲間（くどいかもしれないが、家康は高校生である。）である、研究者の男が暇潰しに作ったものであり、家康が彼とのポーカーで勝利し、戴いたものである。

それはさておきだ。
「だから、俺はこのマシンの名付け親じゃねぇ！！名付けたのはこいつを作った数多って野郎だ！！よって俺は厨二病なんかじゃ、断じてねぇ！！」
「いいえ。アナタは厨二病です。そもそも、組織の名前に「チーム」なんてつけてる辺り、凄く厨臭いです。」
「俺らの組織馬鹿にしてんじゃねぇぞ！！」
『チーム』のメンバー、相馬のバイト先である第七学区の工事現場。現在、阿頼耶家康と、先日彼に引ったくられたバッグを取り返して貰った少女、朔田ハル（さくたはる）が実に下らない言い争いをしていた。
「・・・・・・何でこうなるんすか？」
家康をこの場に呼び寄せた相馬金太郎は頭痛がする思いで頭をおさえた。

話しを遡ること5分前ー
「全然ピンチじゃねぇじゃねぇか！？」
地下街の工事現場に到着した家康はケロッとした表情で金髪巻き毛の少女と共にいる相馬にボヤいた。
「まぁまぁ、固いこと言わず。」

相馬はまるで主婦のような口振りでそう言った。
「てか、早かったっすね。」
「まぁ、『百鬼夜行』だかんな。当然だわ。」
相馬の言葉に、家康はそう答えた。相馬が家康を呼び出してから約１０分もしないウチに現れた。第１９学区から第7学区の距離を約１０分である。流石は第一位の能力者を生み出した研究者の発明といったところか。
「やっぱ凄いっすよね。木原サンの発明は。」
相馬は関心した。すると、家康は
「あぁ、すげぇだろ！！数多の作った『百鬼夜行（カーニバル）』はよぉ！！」
と、まるで自分が褒められているかのように満面の笑みを浮かべた。阿頼耶家康とはそういう人間なのだ。『チーム』の仲間や友人の名誉を自分のことのように誇れる誰よりもスキルアウトの頭に相応しい男。相馬は自分のその考えを再確認した。そうしていると、
「あの、すいません。ちょっと良いですか？」
と横から金髪巻き毛の少女、朔田が手を上げていた。
「なんすか？」
相馬が聞くと
「『カーニバル』って言うのは、それの名前ですか？」
と、家康が持っているセグウェイを指差して言った。
「おう。『百鬼夜行』って書いて、『カーニバル』だ。」
「厨臭いです。」
家康の言った言葉に被せて少女は断言した。一瞬空気が凍りついたかと思うと、
「あぁ！？」
仁王の如き形相で少女を睨む、怪物の姿がそこにあった。
「だから、厨ニ病っぽいって言ってるんです。」
全く怖じけない少女の言動。この瞬間、言い争いは勃発し、現在にいたる…

「あんたら、落ち着くっすー！！」
相馬は叫んだ。だが、
「つーか、てめぇ、何気に数多まで馬鹿にしてんじゃねぇか！？」
「別に良いじゃない。」
と二人は依然、言い争いを続けた。その瞬間だった。相馬は脳内の血管が千切れた感覚に襲われた。そして、彼は作業着の袖口から警棒を取り出し、
「落ちつけっつってるっす。」
と、輝かしいまでの微笑みを浮かべて、警棒を家康の頭にフルスイングした。
「痛ぇ！！何すんだ相馬！？」
涙目で頭を抑える家康に、
「いつまでも本題を忘れて、言い争いを続けてんのが悪いんす。」
と、相馬は微笑みで返した。
「だったら、なんで俺だけ叩かれんだ！？」
額に青筋を浮かべて尋ねる家康に、相馬は
「人間の頭を警棒で叩いたら痛いっすよ。」
と言った。
「俺、人とみなされてねぇ！？」
「15階建てビルから飛び下りて無傷だったり、素手で少年院の独房の檻を破壊したり、走行中の3両編成の電車を右ストレートで脱線させるヤツは人じゃないっす。」
相馬は断言した。
「・・・そりゃそうだが、あんましそういうこと言うなや。」
「何故っす？」
相馬が尋ねると、家康は少女を指差した。
「ありゃあ。完全に怖がっちゃってるっすねぇ。」
相馬は頭を掻いて、困ったような表情を浮かべた。朔田は顔面蒼白で口をパクパクと開閉しながら体をガタガタとふるわせていた。

「つーか、相馬。何で俺を呼び出した？なんか俺に用があるんじゃねぇのか？」
家康がそう尋ねると、
「えっと、用があんのは俺じゃなくてこの子なんすけど・・・」
相馬が困ったように頬をポリポリと掻くと、
「しっかりするっす、ハルちゃん。」
と顔面蒼白で放心状態な少女を揺らした。すると少女は正気に戻った。その少女に家康は
「んで、俺に何の用だ？女ぁ。」
と家康は尋ねた。
「朔田ハルです。」
家康の失礼極まりない呼び方を朔田は訂正させた。
「んじゃ、ハルでいいか。俺になんか用か？」
家康は改めて尋ねた。
「あの、この前取り返して戴いたバッグのこと何ですけど・・・」
朔田の言葉に、
「あぁ、あの時の女の子か。」
と家康は思い出したように言った。
「忘れてたんですか！？」
少女は驚いた。それはそうだ。普通は引ったくりを追いかけることを普通は忘れない。
「まぁ、あの手のことは日常茶飯事だしな。」
と家康は素っ気なく答えた。彼の日常茶飯事という言葉は正しい。家康は能力者嫌いであり、逆に無能力者は体をはって守ろうとするほどだ。その為、『チーム』という集団には『絶対にスキルアウト以外の無能力者に対し、カツアゲや引ったくり、その他一切の攻撃を禁止する。』というものがある。
「あの、その時の事何ですけど・・・」
朔田の申し訳無さそうな口調に、
「あん？どうしたよ？まさか、バッグ弁償しろとか言うんじゃねぇ

だろうな？」
と、冗談っぽく笑って言った。もっとも、あの時家康は、傷一つ付けず、バッグを取り戻したのでそれは有り得ないのだが。そう思った家康だったが
「いえ、弁償するのはバッグではなくて。」
まさかの言葉が帰ってきた。彼女は学生鞄を開き、その中から『ＰＳＰ』ソフトが数本入った袋を取り出し、
「ソフトが壊れて読み込めなくなりました。持ってるヤツ全部です。」
と言ってきた。
「はぁ！？んなこと関係あるわけ・・・」
と家康が言いかけた時だった。ふと思い出した。あの場にレベル３の電撃使いと、常盤台の超電磁砲の次に強いと言われる発電能力者、『電撃暴風（ドゥンナーシュトゥルム）』を持つ、流田薫之丞があの場にいたことを。そして、ゲームソフトやＣＤは強力な磁場でデータを消失することを。それを思い出した家康は
「・・・・・・悪ぃ。『チーム（ウチ）』のメンバーの所為だわ。弁償する。」
「ちょ、リーダー！？」
家康が責任を取ろうとすることを相馬は止めようとした。すると、
「弁償しねぇと、リーダーとしての面子がたたねぇ。それに、学園都市ってとこは、ゲームや漫画がクソ高ぇ。今から全部買い直すのは酷過ぎる。」
と家康は言った。確かにリーダーとしてある程度は責任を取らなければならないし、家康の言う通り、学園都市には学業に関係のない嗜好品には高い課税がしかれるため、ゲーム類の値段が高いというのも事実だ。だが、
「その点については大丈夫っす。彼女、『レンブラント芸術学院』の生徒っすから。」
ということであった。

「何その学校？」
「『学舎の園』にあるお嬢様学校っす。」
「『学舎の園』って？」
「お嬢様学校が敷き詰められた見た目ヨーロッパな、女子学生の憧れみたいなとこっす。」
「ハルがそこの学生である保障は？」
「高校の友達の『学園都市の女子学生の制服全部暗記してるヤツ』に、『この制服、ここらで一番可愛いと思わん？』的な妙な同意をしつこく求められたんでよく覚えてるっす。だからその子は間違いなく『レンブラント芸術学院』の生徒っす。」
ここまできて、家康は暫し呆然とした。そして、
「……てめぇ、お嬢様学校出身の癖にどういう神経してんだゴラァ！！」
さながら金剛力士像のような表情を浮かべる家康にたじろぎながら、
「いや、その、親にあんまり無駄使いするなって言われてて……」
と言い訳がましく聞こえる台詞をはいた。
「それに貴方、超能力者（レベル5）でしょ？奨学金沢山入ってるから大丈夫だと……」
と言った時だった。すると、
「ヤメロ。ソレヲクチニダスンジャネェヨ。」
と呪詛のような毒々しい、ぞっとするような声が響いた。心臓が停止してしまうような、重苦しい空気が流れた。張り詰める空気。このまま自分は死ぬのではないかとさえ思った。だが、
「まぁ、親に節約しろって言われてんなら仕方ねぇな。親を泣かせるつーのは人が一番やっちゃいけねぇことだ。」
と一変して明るい口調で言った。
「取り合えず近くのデパートで良いだろ。そこでさっさと駄目になったゲーム買うぞ。」
そう言って家康はセグウェイを引きずって歩き出した。
「あっ、ちょっと待って下さいよぉ。」

朔田が追いかけようとした時、
「待つっす。」
と相馬に止められた。
「何ですか？」
「言っておきたいことがあるんす。」
相馬は何だか神妙な面持ちで言った。
「これだけは守って欲しいんす。」
相馬が人差し指を立たせて一を表して言った。
「あの人が超能力者（レベル5）だってことには触れないで下さい。」
その言葉に
「どうしてですか？」
と朔田は首を傾げる。
「そんなもん、超能力者（レベル5）であることがリーダーにとって、人生の汚点みたいなもんだからです。」
そう言った相馬の言葉に、朔田は疑問に感じた。
「なんで超能力者（レベル5）であることが恥なの？」
学園都市でたった7人しかない能力者としての最高峰である。普通は誇りに思うところである。
「それは、分からないっすけど……でも、絶対に話さないで下さいよ。『チーム（俺ら）のメンバー』以外がそれを口に出して、ただですんだことないっすから。能力を使わせるなんてもっての他っす。リーダーは能力使うのが一番嫌いなんすから。」
相馬はそう釘を刺した。

「フフン。フフン。」
第7学区にあるデパート。そこには鼻歌をしながらスキップをする少女と、
「はぁ……」

と力なくため息をする、肩を落とし、右手に大量のゲームソフトが入った袋を提げ、左手でセグウェイを引く青年が歩いていた。
「つーかよ、ぜってぇ壊れたソフトより本数多いよな？」
「五月蝿い！！折角溜めた好感度が全てなくなったんだから、これぐらいして貰うのが当然じゃない。」
疑問を提唱する家康だが、朔田にそう言われた家康は何も言い返せなかった。ゲームのデータというものには、金で買えない価値があるのだろう。
「てかよぉ、明らかにＢＬ要素のありそうなゲームがあるんだが、てめぇはこういうのが好きなのか？」
家康が質問すると、
「はい。異性間での恋愛なんて気持ち悪いです。」
朔田は満面の笑みで答えた。なんというか、巷のカップルが聞いたら、怒り狂いそうな台詞である。
「なんつーかよぉ、異性を好きな俺にとっちゃ、悲しくなるような台詞だな。」
家康がそう言うと
「好きな人いるんですか？」
と朔田が尋ねてきた。まさか追求されるとは思ってなかった家康だったが、
「あぁ。いる。眼鏡の似合う、高校教師やってるヒト。正直言って気持ちは届かずの、片思いだがな。」
と取り合えず答えた。そしてため息。片思いという言葉を自分で言って辛くなったのだ。
「片思い…ですか。じゃあ、私と同じですね。」
朔田の言葉に家康は一瞬耳を疑った。異性間での恋愛を気持ち悪いとさっきまで言っていた少女が、実は片思い中の純情少女であるとは夢にも思わなかった。やはり、たとえ腐女子であろうとも、恋愛はするのである。と思っていたら、
「常盤台に通ってる、風紀委員の年下の娘（こ）なんです。ツインテール

のロリロリした、けど可憐で凛としてて、言葉使いが丁寧で、一つ一つの行動が大人っぽい女の子なんです。」
前言撤回。腐女子がまともな恋愛をするワケがねぇ。というか、腐女子で百合持ちって相当性質悪ぃぞ。と、家康は心の中でそう思った。
「けど、その子は超電磁砲、御坂美琴さんが好きで私の恋は叶わないワケで…」
てめぇは宗教に疎そうだから敢えて言わねぇが、叶う叶わねぇの以前に、そいつぁ、神の元に禁じられてんだ。知ってか？神って野郎は創世記で、『産めよ、増えよ』って言ってんだ。同性愛ってヤツぁ、それに逆らった行動なんだよ。と、家康は心の中で毒づいた。
ちなみに、静岡県焼津市在住の家康の両親は二人ともイギリス清教派の十字教徒である。よって家康も、十字教をなんとなく信じている。
「私達って……似てますよね？」
そう言ってきた朔田に、
「一緒にすんな。」
と家康は吐き捨てた。そんな調子で暫くデパートの中をぶらぶらと歩いていると、突然朔田がゲームセンターの前で立ち止まった。
「どうした？ハル。」
家康がそう尋ねると、ハルはＵＦＯキャッチーを指差しながら、
「初音ミクです。」
と言った。確認すれば、確かにＵＦＯキャッチーの中には、現在大人気を博しているボーカロイド、『初音ミク』のワリと大きめのフィギュアがあった。
「たっく。眼鏡成分さえありゃ、完璧だったのにな。残念だ。」
家康はそう評価してゲームセンターを素通りしようとしたが、
「んだ、この手は？いってぇ何がしてぇんだ？」
朔田が家康の手を掴んで離さなかった。
「取って下さい。」

朔田のその言葉に、
「図々しいにも程があんだろが。人にこんだけゲーム買わせといてよぉ。」
家康は額に青筋を立て、何やら怪しげなオーラが見えそうな殺気を放った。
「好きなんですよ。初音ミク。」
それでも必死に主張する朔田。
「んなワガママ聞き入れるか。」
家康は断言した。
「違うんです。ただ好きなんじゃないんです。」
子供のように駄々をこねる朔田に、
「じゃあ、その好きな理由ってヤツを言ってみろや！！」
家康は怒鳴った。すると、
「そ、それは、その…」
朔田は急に顔を真っ赤にして縮こまった。そして、暫く間をあけ、
「す、」
と一音呟いた。
「す？」
家康はその言葉の続きを待った。そして少女は、
「す、好きな人を思い出すから！あのツインテ見てると、好きな人を思い出すから！だから、好きなんです！！」
と恥じらいながらも、だがかなりの大声で叫んだ。デパートの客達は一斉に此方に注目する。かなり目立つ。ただでさえ長身で奇抜な格好で目立つ家康が、叫んだ朔田よりもさらに際立って目立った。
家康はその状況に面倒くさいと言わんばかりに頭を掻き毟った。そして、
「わぁったよ。とって来っから、袋とこいつ持って、ここで待ってろ。」
と言って、袋とセグウェイを朔田に預け、ゲームセンターの中へと入って行った。

「あぁ、クソッダリぃ。何で好きなキャラの判断基準がおれと一緒なんだよ。」
自分が好きな人が、眼鏡をかけているという理由だけで眼鏡キャラが好きになる自分と、好きな子がツインテールであるという理由だけで『初音ミク』が好きな少女と自分が同類であることに、不平不満を呟きながらー

「ありがとうございます！！滅茶苦茶嬉しいです！！」
感謝しながら、袋とセグウェイを隣に置き、ベンチに腰掛ける家康の前で、初音ミクのフィギュアを抱きかかえてクルクル回る朔田に、
「…そりゃ良かったな。」
と家康は適当な返事で返した。そんな彼の隣に、朔田は回転の勢いのまま、腰掛けた。
「ていうか、ＵＦＯキャッチャー得意なんですね！！家康さん！！」
楽しそうに言う朔田に対して、
「あん？俺は下手くそだぜ？」
と家康は黒い笑みを浮かべた。
「でも、結構早く取ってきて……もしかして盗んだんですか！？」
はっとした表情で尋ねる朔田。
「んな心配しなくたって、俺はコソ泥じゃねぇんだ。盗みゃしねぇよ。」
家康のその言葉に、朔田はほっと胸を撫で下ろす。が、
「近くにいた、ＵＦＯキャッチャーが得意そうな能力者を脅して…」
「結局外道じゃないですか！？」
見事に裏切られた。
「っていうか、どうやって能力者を見分けてるんです？」
素朴な疑問。確かに能力者を外見だけで見分けるのは不可能だ。能力者と言っても外見は普通の人間だ。初見で見分けられるワケがな

い。最も能力を使っているならば別だが、これ見よがしに能力を街中で使用する人間などいないだろう。
「見分けてんじゃねぇ。嗅ぎ分けてんだ。」
家康がそう言うと、
「嗅ぎ分ける？」
と、朔田は訳が分からないと言いたげに首を傾げた。
「ＡＩＭ拡散力場の匂いを嗅ぎ分けてんだ。それで能力者かどうか分かんだ。」
家康のその言葉に、朔田はさらに首を傾げ、ポカんと口を開けた。
（まぁ、能力専攻の学校じゃねぇかんな…ＡＩＭ拡散力場なんざ分かる筈ねぇか…）
家康はそう結論付けた。
ＡＩＭ拡散力場には、微量ながら匂いがある。それは、能力の種別ごとに、例えば電撃使いならば酸っぱい匂いが、発火能力者ならば焦げたような匂いが、というように分かれており、レベルが上がるにつれ、その匂いが強くなる。最も、それは専用の機械を使わなければ測定は出来ない。人間は疎か、それよりも遥かに鋭い鼻を持つ犬にも嗅ぎ分けられない。だが、家康にはそれが分かるのだ。
「てかよ、話変わるけどよ～」
「唐突ですね。何ですか？」
強引に話を捻じ曲げる家康にも、取り敢えず話を合わせる朔田。
「お前、初音好きだから曲も聞くよな？」
家康の質問に、
「まぁ、聞きますけどそれが？」
と朔田は返した。
「『一方通行（いっぽうつうこう）』って曲あるじゃん？あれって第一位と……」
「関係ありません！！」
家康が言い終わる前に断言した。
「っていうか、そういうこと迂闊に言わないで下さい。あの曲作った人、その件でそういうこと言われて、否定し続けてるのに、そう

いうことという人が後を立たなくて困ってるんですから。」
ボーカロイドを愛する腐女子の妙な気迫に押され、家康
「えっと、なんかすまん。」
と、つい謝ってしまった。
「悪いことしたし、なんかジュース驕るわ。」
スキルアウトの頭に、悪いことをしたと錯角させる程の気迫である。
「えっ？別に良いですよ。」
「遠慮すんな。ここは家康様の顔を立てやがれ。」
遠慮をする朔田に、強引に驕ろうとする家康。満面の笑みだ。非常に断り辛い。
「じゃあ、『スイカ紅茶』を。」
申し訳なさそうに頼む朔田に対して
「了解！！」
と笑顔で敬礼を決め、自動販売機まで走った。
「…なんというか、スキルアウトらしくない人だな。」
家康の後ろ姿を見ながら、朔田はそう思った。スキルアウトといえば、弱い人間を食い物にし、身勝手に暴れる単細胞な連中というのが、一般的だ。だが、最強最低最悪とまで学園都市に響き渡り、ここ第７学区の駒場利徳がリーダーを勤めるスキルアウト、第１４学区『ストレンジ』を根城にする、今は亡き黒妻渡をリーダーとする『ビッグスパイダー』と並び称される三大スキルアウトの一つ『チーム』のリーダー阿頼耶家康は朔田から見て、善人だった。
「悪ぃ。待たせたな。」
そう言って『スイカ紅茶』の缶を自分に手渡すその表情には、悪という感覚は無かった。むしろ屈託のない正義だった。その正義に見えた表情が急に険しくなった。そして、手渡そうとした『スイカ紅茶』の缶を適当に投げたかと思うと、
「伏せろォォォォォ！！！」
と鬼気迫る形相で叫び、缶に向けて右手を翳した。そのほんの数瞬後だった。アルミ缶が急に潰れたように縮み、中学の理科実験でよ

く見るような、水素の爆発のようなものが起こった。だが、起こった音はその爆発の規模にふさわしくない大爆発だった。

一体何が起こった？

朔田の感想はそれだった。思考しようとしてみるが、

「悪ぃ。ハル。もうちょっとで、怪我さすとこだった。」

停止した。抱きつかれた。生まれて初めて、異性に。

「えっ、あっ！？」

自分の心音が早くなるのを感じた。家康が、缶からレベル４の量子加速のＡＩＭの匂いを感じとり、とっさに缶を投げ捨て、アルミを基点に起こる爆発を、『圧殺空間』で空気圧を操り爆風を押さえつけることで小規模に留めたのだが、そんなこと朔田が知るよしもない。

「すまん。俺がクソなばっかりに。」

消え入りそうな、泣きそうな声で謝る家康。

「あ、あの、その、離して、くくだ、下さい。」

朔田は口をパクパクと動かして無理矢理声を出した。

「あん？まぁ、そこまで嫌つーなら。」

家康はそう言って未練もなさそうに離した。

「あの、一体何が起こったんですか？」

そう尋ねる朔田に家康は、

「何言ってんだ、てめぇ？殺されかけたつーのに、何暢気に言ってんだよ？」

絶句した。

「殺されかけた！？ホントに！？」

朔田は驚愕した。

「あぁ。レベル４の量子加速にな。あの手の能力者は能力が届く範囲が決まってるからまだ、この辺にいる……」

家康は唇の動きを停止した。自分の目線の先、そこに風紀委員の腕

章をつけた男子学生がいた。臭いを確かめれば、
「レベル４…量子加速……」
そう確認すると、彼はベンチに置いたセグウェイを片手で持ち上げ、
「死ねやゴラァァァァァ！！！」
と喉から血が出る程叫びながら、一直線に突進した。
「えっ！？」
間抜けにも聞こえる声を学生は上げた。そしてその瞬間、グシャァァァン！！とセグウェイが粉砕する音と、グチャという肉が潰れる音が響いた。壊れたセグウェイを肩に担ぐと、
「能力者が無能力者を傷つけようとすんじゃねぇよ、五流ヤロウ。」
と吐き捨てた。戦場に舞い降りた悪魔のような、兇悪な笑みを浮かべて。この瞬間に、朔田は理解した。阿頼耶家康は、無能力者から見れば正義であり、能力者から見れば悪そのものであると。つまり、彼の正義と悪は何処までも曖昧なのだ。けれども、朔田はそれでも彼の明るい微笑み、優しさ、そして体の温かさの方が印象が強かった。

第８学区のスターバックスコーヒー。金髪パーマに、左目に泣きぼくろ、白い学ラン、左腕につけた『風紀委員長』とかかれた腕章が特徴的な少年は、
「失敗しちゃったかぁ～。」
と軽い調子で言った。
「当然の結果だぎゃ。学区外からの攻撃で沈む程、第六位は甘くないんさ～。」
隣に座る黒髪に中世的な顔立ちの、若草色のブレザーの下にパーカーを着た、同じく左腕に腕章を付けた少年が金髪パーマの少年に言った。

「いや、学区内でやっても、傷一つ付けられなかったね。なんせ公園全てを巻き込む規模の爆発をクラッカー程度の爆発に変えられちゃったんだから。」
彼はため息混じりにそう言うと、黒髪の少年の手元を見て、
「ねぇ、さっきから砂糖何杯目よ？」
と尋ねた。すると彼は砂糖の袋を開け、中身を手元に置いた飲み物に入れながら
「17杯目たい。」
と素っ気なく答えた。
「で、その飲み物は？」
「キャラメルマキアートだべさ。」
その答えにブーッと、飲み途中のカプチーノをふいた。そして、
「何考えてんの！？糖尿で死にたいわけ！？」
とツッコんだ。
「俺にとってはこの位が普通とよ。」
そう言って、その飲み物をさも美味そうに飲むその男に、金髪の少年は襲ってくる吐き気をひたすら堪えた。
「っていうか、どうしよ。大事にしてたオモチャ、壊れちゃったし。」
金髪の少年はそう言ってボヤくと、ズボンのポケットから音楽プレーヤーを取り出し、
「やっぱり、コイツの力で化物と同じ立ち位置に立つしか方法は無いと思うんだけど、どうかな？」
と尋ねた。すると、黒髪の少年も
「奇遇だがや。俺も第七位を狩るには、ヤツと同じ超能力者（レベル5）になるしかないと思ってたずら。」
と言って同じような音楽プレーヤーを取り出した。
それは、彼等がスキルアウトから奪った押収物。
学園都市の都市伝説でしかない筈のモノ。

その名は　『幻想御手　－ｌｅｖｅｌ　ｕｐｅｒ－』

二人の少年はそれを手に、無気味にほくそ笑んだ。

## 第三話　一方通行（後書き）

用語&キャラ紹介

朔田　ハル

ＣＶ．藤田咲

所属　レンブラント芸術学院

年齢１５歳

身長　１５８ｃｍ

体重　４２ｋｇ

容姿　金髪に巻き毛、目は茶色　読者モデルばりの美少女。

概要

常磐台のとある風紀委員に恋する女の子。いわゆる百合。更には腐女子属性まで備えている残念美少女。ゲームも大好きで、薄桜鬼等の恋愛シュミレーションを好む。異性間での恋愛は気持ち悪いらしい。なお、家康に抱きつかれた時の胸の高鳴りは理解不能。

相馬金太郎

ＣＶ　市瀬秀和

所属　上条の高校

年齢　１５歳
身長１７０ｃｍ
体重５６ｋｇ

容姿
後ろで束ねた男にしては長い銀髪。やんちゃ系な男子。

概要
『チーム』のメンバーにして、不登校の少年。建築業者でバイトしている。服の袖に警棒を忍ばせているが本来の武器ではない。また、『チーム』内での喧嘩の実力は能力なしなら、リーダーである家康の次に強い。偶に、狂気を見せるが、彼が不登校である理由になっているらしい。

三大スキルアウト
学園都市において、強く、タチの悪い三つのスキルアウトのこと。駒場のスキルアウト、『ビッグスパイダー』、『チーム』がそれである。

制服を全て暗記している少年
青髪ピアスこと、高天原正義（青峰奴御）のこと。彼の活躍は、『とある結界術の渾沌世界』で見れるぞ！！

一方通行（いっぽうつうこう）
ボカロの曲。第一位とは関係ない。なんだか、歌詞に彼をイメージさせるが、気のせいである。また、『ラストオーダー』という曲もあるが打ち止めとは関係ない。

レンブラント芸術学院
学舎の園にある、美術、書道、音楽を専門に習う学園。有名な音楽家や、芸術家の娘が多く通う。

静岡県焼津市
家康の自家。漁業で有名。ちなみに作者の出身は浜松市である。

ツインテールの風紀委員
みんな大好き白井黒子のことである。また、ハルは彼女が好き。

# 第四話　日常生活？

第7学区　サークルK

『チーム』のナンバー2流田薫之丞と、『チーム』のメンバーの一人相馬金太郎は雑誌を立ち読みしていた。第7学区に用があった流田が相馬とばったり出くわし、まだ約束の時間まで少しばかり時間があるということでこうなったのだ。ちなみに流田は学校帰りの為、長点上機学園の制服、相馬はバイト休みの為、私服で好んで着る、モスグリーンのつなぎに赤いTシャツといった格好である。相馬は、

「しかし、下らないっす。この『怪奇！学園都市の都市伝説特集！』は。」

と、自分が毎週買っている学園都市限定販売の情報雑誌『週刊世間』のコーナーに対してそう評した。

「その雑誌のそのコーナーが下らねぇのは、いつものことだろ。」

相馬の隣で『週刊少年ジャンプ』を読む流田が言った。

「第7学区の喧嘩通りで女の子をナンパをしたら、伝説の多重能力者（デュアルスキル）『死霊支配（デッドマスター）』が地獄の底から現れる。窓の無いビルの前を夜歩くと、虚数学区五行機関に迷い込む。人前でいきなり脱ぎ出す脱ぎ女。第三位のクローン。どんな能力も効かねえ能力者。地下に封印された8人目の超能力者（レベル5）。」

流田はこれまで取り上げられてきた記事を挙げて、

「どれも有り得ねぇつーの。」

と真っ向から全てを否定した。

「そうっすよね。」

相馬がそれに同意する。

「今回のもなんだつーんすよ。使っただけでレベルが上がる『幻想御手』だぁ？んなもんありゃ、制作者はとっくにリーダーに殺されてるっすよ。」

相馬がそう言った時だった。
「クハハハハハハハ！！」
流田は高笑いした。
「いきなりどうしたんすか？」
「いや、世の中には有り得ねぇなんて言葉、ねぇんだなって思ってよぉ。」
相馬の質問に流田はそう答えた。そして、ズボンのポケットから音楽プレイヤーを取りだし、
「てめぇが有り得ねぇつった『幻想御手』、ここにあんぞ。」
と言いニヒルな笑みを浮かべた。
「ただの音楽プレイヤーじゃないっすか。」
「ただの曲なんだよ、『幻想御手』ってのは。」
相馬は、
「ただの曲って・・・んなもんでレベルが上がるんすか？」
と疑問を提示した。流田は、
「あぁ、上がるぜ。もっとも、使ったヤツァ調子こいて、『虚空爆破（グラヴィトン）』とかいうクソ事件を起こしちまったがな。」
と答えた。
へぇと、相馬は適当な相槌で返すと、
「・・・って、あの事件流田サンが一枚噛んでたんすか！？」
いきなり声を大にして驚いた。
「一枚噛んでるっつーか、異能力者のガキに『幻想御手』売りつけただけなんだがな。」
流田のその言葉に、
「マズイじゃないっすか！？リーダーにバレたら殺されますよ！？」
と相馬は声を荒げた。
「大丈夫だって。無能力者には絶対流さねぇから。」
笑顔でそう言う流田。
「俺が言いたいのはそういうことじゃないっす！！」
「じゃあ、どういうことだよ？」

相馬が言いたいことを、追求する流田。
「無能力者狩りが今より酷くなったらどうするんすか！？」
無能力者狩り。能力を持て余した者が、率先してスキルアウト以外の無能力者を襲うことである。これを行っている者の中には、異能力者や大能力者が多く、もしレベルが上がってしまえば、それが余計に酷くなるのは必至だ。だが、
「安心しろ。こいつはてめぇが思っている程、万能じゃねぇ。」
と言って、笑った。
「どういうことっすか？」
「これ使ったら、脳に異常が出るんだ。」
流田は手のなかにある『幻想御手』を指の先でクルクルとバスケットボールのようにまわした。
「これはな、音による共感性を利用して使用者の脳波パターンを統一させることで、巨大なネットワークを構築する道具だ。そうして完成したネットワークで使用者は演算をするわけだから、能力は結果的に上がるが、誰かがどっかの馬鹿の演算を肩代わりすることになっから、脳への負担が馬鹿みてえにデカイ。だから、こいつを使えば、脳になんらかの影響が出るんだが・・・」
そう『幻想御手』の説明をした後、百面相をする相馬に
「分かってくれた？」
とたずねた。
「大体分かったっす。」
そう笑顔で言う相馬は確実に理解していなかった。
「てか、そろそろ時間だな。」
流田は右腕につけたブランド物の腕時計を眺めると『ジャンプ』を棚に戻し、コンビニを出た。
「どこに行くんすか？」
自分についてくる相馬に、
「こいつを売りにな。」
と言って、流田は『幻想御手』を見せる。

「重福とかいう女で、なんでも常盤台のお嬢様に復讐したくてコイツがいるんだとよ。」
「いくらで売るんすか？」
「二万くれぇかな？」
学生にとってはとんでもない額だ。学園都市の、安めに設定されている学生寮の一ヶ月の家賃に、匹敵するだろう。
「金も稼げて、能力者を潰す手間も省けて、一石二鳥っすね。」
相馬は遠足ではしゃぐ子供のように笑った。
「さらに、コイツの製作者も、書庫（バンク）に登録されてる脳波パターンから読み取れた。『幻想御手』のことでそいつを脅せばさらに金が入るぜ。」
相馬に対し、流田は自慢気に語った。学園都市のネット社会で有名な天才ハッカー『守護神（ゴールキーパー）』を出し抜いてハッキングが出来れば、自慢気になるのも当然である。
「流石は『チーム』の頭脳っす。やることが悪どいっす。」
「誉めてんのか？それは？」
相馬の言葉に苦笑いの流田。

誰よりも能力者を嫌い、何よりも無能力者を大切に思う『チーム』の二人は、能力者にとって悪で無理能力者にとっては、正義となりうる行動をせんがため、学園都市の町並みを悠然と歩いていた。

所変わって第１９学区の公園では
「あちーな。」
阿頼耶家康はそう言って太陽を忌々しそうに見上げていた。
「俺は酒をのためならこんな暑さなんざなんのそのだぜ。」
家康の隣を歩く、白衣に黒に白いラインの入ったポロシャツを着た木原数多がクククと、嬉しそうに笑った。
「はぁ。」

家康は深いため息をした。
先日家康がセグウェイを武器にして大破させた、その修理を製作者の木原に依頼したら、
「修理代代わりに、てめぇ持ちで飲みにつれてけや。」
という流れになり、現在に至る。家康は木原と飲みに行くことが基本的に好きだ。だが、それは割り勘の場合に限る。自分の驕りとなると頭が痛くなる。性質が悪いことに木原は酒に対して異常なまでの耐性があり、常人だったら死に至る量の６倍を、平気で飲む。以前、家康が学園都市のＶＩＰ　向けのバーで奢ったら、支払い額が８桁に到達していたのは、良い思い出である。だから、家康は木原には、二度と酒を驕りはしないと決めていたのだが・・・
「ヤベ、マジで泣きそう。」
現状を再確認すると、涙腺が崩壊しそうになった。前回とは違い、教師向けの普通の居酒屋とはいえ、６桁は酒代に持っていかれるだろう。
「タダ酒飲めるってのは、気分が良いねぇ。そう思うだろ？家康？」
「それはてめぇだけだぞ、数多クン。」
さりげなく家康は毒をはいた。そんな彼の耳に、
「不幸だぁー！！」
と叫ぶ少年の声が響いた。いつぞや世話になったあの人の高校に通う上条とかいう少年だろう。何故、１９学区にいるのか、訳が分からないが、それを叫びたいのはこっちだボケと、家康は心の中で毒づいた。
今日も『チーム』の縄張り、第１９学区は平和である。
筈であった。
彼らが公園をくぐり抜け、居酒屋に直行しようとした時に、
「またやってくれましたね、阿頼耶くん。」

と、金髪にウェーブがかかった髪に、ライトグリーンの瞳の少女が困ったような表情を浮かべて立ちふさがった。家康に抜き身の刀の切っ先を向けながら。
「てめェ・・・どういうつもりだこりゃ・・・」
家康は怒りに満ちた表情で少女を睨んだ。どうやら、家康が望むような平和な日常にはならないらしい。

一方、相馬と流田は充実感に溢れた表情で第7学区を歩いていた。
「結構高く売れたっすね。『幻想御手』。」
相馬の言葉に流田は、
「まぁ、悪くねぇ額だ。」
同意した。彼等が受け取った額は三万円。学生の出す金額しては相当の金額だ。
「それにしても、あの子どんな凶悪犯罪を犯す気なんでしょうね？」
相馬が尋ねた。
「さぁな。能力者の気持ちなんて分かんねぇし。」
流田のその言葉に、
「いや、あんたも能力者っす。」
とツッコんだ。
「ところで、流田サン。」
「あ？どうした？」
「さっきの、都市伝説のことなんすけど・・・」
さっきって、コンビニではなしてたあれかよ。さっきつーか、全然前だぞ。と思いながらも流田は、
「都市伝説がどした？」
と言って話を広げることにした。
「都市伝説の中に、『なんか結構有りそうで、でも有ったら嫌だなぁ』って感じのあるじゃないっすか。」

「確かにあるな。『コーラで骨が溶ける』ってかんじの。」
この場合の流田の例は確実に的を外しているだろう。
「まぁ、これもそういう部類なんっすけど。」
流田の例えの間違いを指摘せずに相馬は話を進める。
「駒場利徳ってスキルアウトのリーダーいるじゃないっすか。」
その名前が、都市伝説に出てくるとは意外だった。駒場利徳といえば、三大スキルアウトの一角のリーダーだ。そのカリスマ性は、同じ三大スキルアウトの、『チーム』のリーダーである家康、『ビッグスパイダー』のヘッドである（故）黒妻渡にけしてひけをとらないという。体格は大柄で、１９９ｃｍの体躯の持ち主の家康を見下ろす、威厳と風格に溢れた男だ。『チーム』が創立して間もない頃に彼の所と抗争になったこともあるため、流田は彼のことをよく知っていた。だが、流田の知る限り、彼には都市伝説になるような秘密めいたことなどなかった。だから、流田は彼の伝説とやらに興味があった。
「実をいうとですね。あの男、幼女を監禁して、ペットにしてるらしいっていう伝説があるんす。」
ヒソヒソと、噂話をする主婦のような面持ちで相馬は言った。
「・・・はい？」
拍子抜けだった。耳を疑った。駒場に纏わる都市伝説に期待してみたが、蓋を開ければご覧の通りである。
「なぁ。都市伝説ってそんだけ？」
流田は一応相馬に確認をとる。
「そんだけっす。」
返ってきたのは自信に満ちた笑みだった。流田はガックリと肩を落とす。
「なんつーか、都市伝説？って感じの話だな。」
流田はそう評価を下したあと、
「でも」
と続け、

「信じたくない部類の話ではあるな。」
と評した。
「もし、これが本当だったらぶっ殺してやりたいっす。」
相馬は、笑顔ながらも右拳を腕の血管が浮き出るほど握りこんで、宣言した。
「同感だな。」
と、流田。
っていうか、あのゴリラがロリコンってマジでキツイわ。見た目、『ガゼット』のボーカル似のうちのリーダーが、眼鏡っ娘萌えで、アジトのあいつ専用の個室に『刀を手にした赤眼の眼鏡巨乳少女』やら、『眼鏡にベレー帽の女子小学生』やらのポスターが貼ってあり、何故か白濁色の液体がついてるだけでも、相当引くっつーのに・・てか、俺駒場とタイマン張って、負けた上に、アバラ６本もイカれたんだよな・・・ロリコンな上に、監禁までやってる変態にまけたのか・・・ショックだわ～
と、失意の下、項垂れ歩いていると数１０メートル先Ｔ字路にある光景が広がった。プロレスラーのような巨体が、焦燥に駆られた表情で走っていた。その厳つい顔に、流田は異常なまでの見覚えがあった。そう。件のゴリラロリコン性犯罪者野郎こと、駒場利徳である。何かを抱き抱えていた。それは、金髪碧眼の、体の起伏に乏しい、言うならば、多分恐らく、きっと、というよりも確実に、
「駒場サンが幼女を誘拐してますね。」
受け入れることを拒んだ現実を、相馬が笑顔で突きつけた。
「あはははは。」
流田は虚無的な笑いがこみあげた。
「ふふふふふ。」
相馬も愉快そに笑う。この時、二人の中で、ブチッ、という音を立てて、確実に何かが千切れた。ゆっくりと、二人は深呼吸し、
「あンのっ、マウンテンゴリラがアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

と魂からの咆哮を上げた。そして、二人は、
「ウオオオオオオオオオオオオ！！！！！」
と学園都市中に響くほど叫びながら、駒場を追走した。

神の裁きを下す為に・・・

## 第四話　日常生活？（後書き）

キャラ紹介＆ａｍｐ；用語説明

木原数多
年齢３４
ｃｖ　藤原啓二

家康の友人にして、一方通行を生み出した研究者。かなりの飲んだくれ。常人の致死量の６倍の量の酒を平気で飲む。だが、それすらも底ではない。化け物である。また、幼い頃から友人が少なく、家康と『チーム』のメンバーくらいしか友達がいない。『北斗の拳』や『はじめの一歩』といった格闘漫画や『クレヨンしんちゃん』を好んで読む。

（故）黒妻渡
生きてます（笑）

刀を持った赤眼の眼鏡巨乳少女
『園原杏里』のこと

ベレー帽に眼鏡の女子小学生
『テレポーター葵』のこと

週刊世間

学園都市限定のゴシップ誌。確かな情報を載せていることで評判だが、都市伝説だけは信憑性が薄いことで有名。相馬が毎週購読して

いる。

週刊少年ジャンプ

ＯＴＯＫＯの浪漫と夢が詰まっている

『ガゼット』のボーカル

ｔｈｅ　ＧａｚｅｔｔｏＥ　のボーカル、『流鬼』のこと。流田曰く、家康は彼に似ているらしい。

# 第五話　日常生活？（前書き）

テスト死にました（泣）

# 第五話　日常生活？

第１４学区『ストレンジ』。
言わずもがな、三大スキルアウト『ビッグスパイダー』のお膝元であり、数々のスキルアウトの根城である。そこにある廃屋の一つを根城とする『八汰烏』というスキルアウト集団が存在する。最近台頭してきたスキルアウトで、第１４学区、第１５学区の学生の中には彼らの名前を聞くだけで震え上がるという。そんな名のあるスキルアウトは、本日未明、全滅した。
「骨がねぇな。それでもてめぇらスキルアウトか？」
紫色に染めた髪を坊主にして、剃り込みを入れた、学ランを着た少年が言った。
「・・・弱い。」
紺色のジャージを着た、白いニット帽を被り、口をマスクで覆った、目に光が失せた、表情に乏しい、
２ｍを越える大男がぼそりと呟いた。
「畜生・・・」
『八汰烏』のリーダーと思わしき金髪の男は悔しそうに唇を噛み締めた。自分が地面に倒れ伏しているという事実、総勢３７名の仲間が全員延びているという事実を体感しているというのに信じられなかった。たった二人の少年にいきなり襲撃を受け、ものの１０分足らずで全滅したことが。自分達は、実績のあるスキルアウトだと自負している。上位の能力者を喧嘩で倒したこともある。今まで二つのスキルアウト集団を壊滅させてきた。それなのに、たった今自分達は二人の少年を、たった二人の少年を相手に全滅した。
「何なんだ？何なんだよ、てめぇらは？」
聞かずにはいられなかった。
「何っていわれてもな・・・」
紫色の坊主頭の男は、困り果てた表情で頭を掻いた。

「何だっつてんだよ！！」
金髪の男は怒鳴った。
「こういうもんだけど？」
そう言って紫色の坊主は、イタズラがバレた子供のようにペロリと舌を出した。
「なっ・・・！？」
金髪の男、『八汰烏』のリーダーは絶句した。目の前の少年の行動にではない。舌に描かれた、刺青にだ。銀色一色に塗りたくられた、飾り気のない星。いや、これは恐らくー
「『銀の海星』、　だと！？」
三大スキルアウトの一角、学園都市最強最低最悪と言われるスキルアウト『チーム』のメンバーのシンボルマークと言われるそれであった。刺青であったり、ペンダントであったり、ピアスであったり、その形状は決められていないが、彼らはどこかにそれを付けているのだ。
「じゃあ、お前も・・・」
紫坊主の隣に立つ、無表情な大男に尋ねると、
「・・・・・・」
何も言わず、右手の薬指につけた星があしらわれたシルバーアクセサリーを見せた。
「て、てめぇら、『チーム』のメンバーか・・・」
『八汰烏』のリーダーがそう悟ったように呟いた。
「あぁ、『チーム』のメンバー、籍弦太郎だ。」
「・・・神原シヲン・・・・・・」
それぞれが自己紹介をした。すると、
「なっ・・・！？」
『八汰烏』のリーダーは、さらに驚愕した。
「あ？てめぇら、何驚いてんの？」
紫坊主、籍が首を傾げた。驚いている、というより、金髪の男は震えていた。何故震えてるのか、二人には分かった。自分達の名前を

聞いたからだ。
「てめぇら、まさか『五亡星(デススター)』の『ゲン』と『シヲン』か？」
予想的中。二人はそう思った。
「まぁ、俺らをそう呼ぶ奴もいるな。」
「・・・正直迷惑。」
『五亡星』ー『チーム』の中でも、絶対に喧嘩を起こしてはいけないと言われる5人、『阿頼耶家康』『流田薫之丞』『相馬金太郎』『籍弦太郎』『神原詩音(シヲン)』を指して言う、スキルアウト間での異名である。恐らくく『チーム』のシンボルマークから由来しているのだろうが、家康を始めとした本人達は『センスが無くてカッコ悪い』と気に入っていない。
「なるほど・・・俺達はお前達を怒らせた時点で潰れてたって訳か・・・」
金髪の『八汰烏』のリーダーの男は悟った。だが、分からないことがある。
「教えてくれ。俺達は・・・」
『いつお前達を怒らせた？』たったそれだけ。それだけ尋ねようとしたのだ。だが、
「ハナシが長ぇぇぇぇエエ！！」
次の瞬間に飛んできたのは、理不尽な言いがかりと、籍のフリーキックだった。馬鹿げた威力の蹴りが、金髪の男の鼻に一点集中して爆発し、体が空中で一回転して吹っ飛んだ。
「・・・やりすぎ・・・・・・」
神原が呟いた。すると、籍は
「てか、もう話てんの、ウザくなった感じなんだわ。俺、作文にしたとき三行超える台詞聞いてられんし。馬鹿だから。」
と言って、ガハハハと馬鹿笑いした。
「・・・籍、原作の説教タイムに耐えられないね。」
「説教タイム？原作？お前、何のこと言ってんの？」
神原の謎の一言に、籍は首を傾げた。

その頃、『五亡星』と呼ばれる別の二人は・・・

「待てェェェェェェェェェェェい！！」

第7学区にて性犯罪者（駒場利徳）を追走していた。

「ちくしょう！！あのデカブツ速すぎっす！！」

相馬は泣き言を吐いた。それもそうだ。かれこれ15分近く全力疾走を続けているのに一向に駒場に追いつけないのだ。泣き言も言えてくる。

「このままじゃ、追いつけねぇな・・・」

普段クールでクレバーな流田も、業を煮やし始めた。そして、

「よし、相馬。てめぇ、この先の公園に先回りしろ。俺がコナン君クオリティの脚力で、ゴリラをそこまで追い込むから。」

と、提案した。すると、

「なるほど！了解っす！」

と相馬は言って、流田の指定した公園に先回り出来る路地裏へと、進行方向を変更した。それを見送ると、

「よし。んじゃ、俺も。」

と言って流田は頭に演算式を作り出す。演算によって生み出された電気と磁場は、流田の足つぼを刺激し、セオリーにない脚力を生んだ。流田はいとも簡単に駒場に追いつくと、

「観念しやがれ！ロリコン野郎ォォォ！！」

と駒場に言い放った。すると駒場は、

「ロリコン？お前は何のことを言っている？」

間の抜けた表情で言った。

「はぁ？」

と、流田はその言葉の中に『しらばっくれてんじゃねぇぞ。』の意味を込める。

「お前、阿頼耶のところの・・・なるほど、あいつの所はそそっか

しい奴が多い。」
駒場は自己完結した。
「あぁ！？」
流田は、既に２０００ｍは走っているだろうにも関わらず、息一つ切らさず走る駒場の一言に苛立った。
「結論から言えば、俺はこの娘を助けたに過ぎないということだ。」
駒場のその言葉に、
「何から助けたつーんだよ。」
流田は一つの疑問を提示した。すると、駒場は何も言わず自分の真横、つまり自動車道を親指で指した。そこは何もない空間だ。だがしかし、常盤台の超電磁砲の次に強いと言われる電撃使いの、微弱な電気のセンサーには、それが引っかかった。バイクか何かに乗る１０人くらいの人間が。そして、音も聞こえず、見ることも出来ないという二つのキーワードが流田に、ある集団を連想させた。
「コイツら・・・『カメレオン』か・・・！！」
「ご名答だ。」
『カメレオン』。無能力者狩りを行っているタチの悪い集団である。その特徴は、音も姿も無く狩りを行うことである。音波操作系のレベル４と、光学操作系のレベル４の能力者を有するためそういうことができるのであろう。
「なるほどな。ようするに、こいつらは無能力者狩りで、何の力もない女の子を攻撃した。そこを駒場、てめぇが助けた。そういう訳だな？」
流田が話を纏めると、駒場は頷いた。どうやら、『ロリコン説』の真相もそういうところにあるようだ。
（実際は性犯罪者とはかけ離れた、良い奴ってことだったってワケか・・・）
流田はそう考えると、
「良いね、そういうの。薫之丞さんはそういう馬鹿は大好きだぜ。」
と言って笑った。

「そこでだ。提案があるんだが乗ってくれるかい？駒場？」
その回答に駒場は、
「悪い話でなければな。」
と答えた。
「まぁ、悪い話じゃねぇよ。てめぇらを助けるんだからよ。」

「おい、家康。その女誰だ？」
家康に対して刀を向ける女を指差して、木原はそう尋ねた。
「・・・能理香＝ウェイル＝ロックゲート。俺のクラスメイトで、風紀委員やってるお節介なヤツだ・・・」
さも忌々しそうに答える家康。
「まぁ、風紀委員とかお節介とかどうでも良いけどよ、」
そう言って、能理香が握りしめる刀を指差して、
「なんでこいつ刀持ってんだ？」
と素朴な疑問を提示した。
「あぁ、ロックゲートは『柳生新陰流』と『天然心流』を弱冠１２歳で極めた剣の達人なんだわ。無能力者のコイツが風紀委員になれたのは、このスキルのお陰だから、多分帯刀も許可されてんだろ。」
そう答える家康。『柳生新陰流』、『天然心流』。どちらも江戸時代において名を馳せた天下無双の豪剣である。家康のクラスメイト、つまり長点上機学園の生徒たるには秀でた一芸が必要である。無能力者が風紀委員になることも同じことだ。彼女にとっての秀でた一芸とは、『剣術』なのだろう。だが、
「なんつーか。剣の扱いが上手いってだけで、銃刀法違反させる頭のわりィヤツ等がこの街の治安を守っているって考えると不安になっちまうな。」

学園都市の裏社会で猟犬部隊(バウンドドッグ)のリーダーとして稀に治安を乱す木原は大真面目にそう言った。
「奇遇だな、数多。俺もだ。」
スキルアウトのリーダーであり、治安を日常的に乱している家康も同意した。
「あの、なんだかワタクシ非常に失礼なこと言われてません？」
ロックゲートが尋ねた。
「言われたくなきゃ、刀向けんな」
そう家康は吐き捨てる。
「刀を向けられるようなことをする貴方が悪いのですわ」
ロックゲートはそう言い返した。
「訳分かんねぇ・・・一体俺が何したっつーんだよ？」
家康のその言葉に、
「食い逃げでもしたんじゃねぇの？」
と木原は一言。
「それはテメェだ、馬鹿数多」
「あん？俺はただ金を払わずに飲み食いしただけだぞ？」
家康の言及に、そう答える木原であったが、世間一般ではそれを食い逃げというのである。
「阿頼耶くん、貴方、本当に自分が何したか分からないんですか？」
木原と馬鹿馬鹿しいやり取りをする家康に対してロックゲートは尋ねた。
「あぁ。分かんねぇ」
家康のその答えにロックゲートは、
「信じられませんわ・・・あんなことをしておいて、あまつさえそれを忘れてしまうなんて・・・」
と、絶句する。
「パトロール中の風紀委員にいきなり武器を持って襲いかかるなんて大それたことをして・・・しかも、全治半年の大怪我までさせておきながら・・・あなたはそれにわるびれようとはしないのですか

！？」
ロックゲートが家康を問い詰めるすると、
「フハハハハハ！！」
彼は、塞き止めれていた水が溢れるように、盛大に笑い出した。
「何が可笑しいんですか！？」
「いや、テメェ何もかも間違ってやがるわ」
家康はそう言って、さらに吹き出した。
「なんつーかよ、そいつが何したかとか確かめずに、この阿頼耶家康様に尋問なんてしてる時点で終わってやがるわ。そいつはよぉ、力もねぇ無能力者の女の子を平気で襲って、殺そうとする奴なんだわ。てか、全治で済んだだけでも有り難く思えつーの。普通、一生治んねぇ怪我をおわされても、なんらおかしくねぇんだからな」
一見正義の味方のようにも聞こえる一言である。だが違うのだ。ロックゲートにはわかる。彼の正義（それ）はヒーローなんかではなく、自分勝手な暴君のモノであると。
「つーかさぁ、仮に俺が全面的に悪かったとしてだ。それでも俺は謝る必要なんざねぇと思ってるけどね」
家康のその一言にロックゲートは、
「それは・・・どうしてですか？」
と尋ねる。
「能力者である時点で怪我したことを訴えるだとか、そんな人権はねぇからだよ」
そう爽やかすぎるほど、清々しい表情でそう言って、
「そう思うよな？数多？」
と木原に同意を求めた。すると、
「ん？まぁねぇんじゃねぇの？実験動物（モルモット）に人権なんて」
と、一族特有の邪悪すぎる意見が返ってきた。
「つーわけだ。たかが実験動物（モルモット）一匹じゃ、動物愛護団体ですら動かねぇって話よ。だから、これ以上このことで俺にとやかく・・・」
家康の発言は、『バチン！！』という乾いたおとによって断絶した。

頬に走る、ピリピリとした痛みに鳩が豆鉄砲を食った様な表情をうかべる家康。
「最低ですわ・・・阿頼耶くん・・・」
家康の頬をひっぱたいたロックゲートはそう言った。
「あの風紀委員、灰谷求（はいたにもと）さんは、精神感応系能力者に操られて、守るべき市民を、自分の意思と反して攻撃してしまったんです！！それを知らずに、勝手なことを言わないで下さい！！」
ロックゲートは怒鳴った。理不尽で、自分勝手で、それでいて傲慢な正義を抱える家康を。
「それに能力者には人権がない？それこそふざけていらっしゃるわ。人権はこの街の市民全員に共通して存在していますわ」
当然の、倫理とかそういう観点から言ったら当然過ぎる一言だった。
「とにかく、貴方には人としての価値は有りません。最低です」
その一言が家康の心に突き刺さった。どこまでも、深く、深く、深くー。

「さあて駒場利徳ゥ！！さっさと現れるっす！！」
流田が指定した公園にて、相馬は人知れず闘争心を高めていた。手には８ｍ程の長さの革製の鞭が握られている。所謂牛追い鞭（ブルウィップ）という武器で、学園都市製の特殊合皮で出来ている。相馬が、抗争等の大規模な戦いで用いる彼が最も得意とする武器だ。彼はそれを使い、駒場を叩きのめすつもりである。そんな相馬の携帯が鳴った。（着信音はＲＥＢＯＯＮ　のオープニング『ｌａｓｔ　ｃｒｏｓｓ』である）
「もしもし？」
『あぁもしもし相馬？流田だけど』
「どうしたんすか？」
『すまんが、こっちに俺ら来たら駒場じゃなくて俺の後ろに攻撃してくれねぇ？』
「どうしてっすか？」

『すまん！！そろそろそっち着くから説明してる暇ねぇとにかく頼む！！』
そう言い残して携帯は切れた。
「？訳が分からないっす」
相馬はそう呟き首を傾げた。そうしていると
「おっ！来たっす！」
流田が現れた。隣には気を失っている金髪碧眼幼女を抱えて走る駒場（コンロリ）の姿も見える。
「後ろっつっても、何もいないっすね・・・俺としてはさっさと駒場を裁きたいとこっすが・・・」
目の前の様子を考察しながら相馬は呟く。
「まぁ、ここは流田サンに従いますか！」
相馬は地面を思い切り蹴りつけ、流田の方に直進し、
「うるぁぁぁぁ！！」
と叫びながら、流田の後方に思い切り牛追い鞭を振るった。すると、
『バチン』と鞭特有の音を響かせながら、
「ぐあぁっ！！」
と何者かが呻き声を上げながら吹き飛んだ。その瞬間9名のバイクに乗った男女の姿が露わになった。相馬が吹き飛ばしたそいつが運がよいことに、光学迷彩で仲間の姿を消していた能力者だったのだ。いきなりのことに驚き、光学操作（ライトハンズ）の名前を呼ぶ仲間達。
「えっと・・・どういうことっすか？」
状況を把握仕切れない相馬は思わず首を傾げる。そんな相馬に対して、
「相馬！！あいつら、無能力者狩りだ！！」
と流田は言った。その瞬間、相馬は豹変したかのように、おぞましい表情になり
「無能力者狩り・・・悪・・・許さん・・・」
と呪詛のようなモノを吐き出し、
「果てろォォォオ！！」

と叫びながら、『カメレオン』のメンバーに牛追い鞭を振るった。
「うぎゃあああ！！」
「ギャアァ！！」
そんな叫び声と共に、次々と無能力者狩り達は吹き飛んだ。死々累々。そんな言葉が相応しいだろう。
「南無」
相馬の鞭を受けている哀れな無能力者狩りに対して、流田は合掌した。鞭と聞くと、拷問用の武器で殺傷力があまりなく、戦闘には向かないというイメージを持つ者が多いだろう。実際、素人がこれを振るったところで対した威力はない。素人が持てば。しかし、相馬はスポーツウィップのシューティングとシングルクラッキングの日本記録を持つ鞭の達人である。達人の鞭は先端のスイング速度が音速の2倍～3倍に達する。人体に当たれば容易に人の骨を叩き折ることが可能だ。現に、『カメレオン』のメンバー達は腕や足を押さえてのた打ちまわっている。一番酷い状態の者に至っては、折れた肋が肺に突き刺さり、泡を吹いていた。まさにこの世の地獄と形容していいだろう。だが、
（あれでアイツ、まだ全力じゃねぇんだよな・・・なんせアイツがあれを全力で振るえば、乗用車が一撃でスクラップになるんだから）
流田はそんな様子を見てそんなことを考えた。音速を超える一撃で骨が折れるのは、普通のなめし革の鞭の場合だ。相馬の鞭は、外の技術力の２０年は先を進んでると言われる学園都市製の特殊合皮で作られている。当然威力も普通では済まされない。
「さぁて。次は手前の番だぞ、ロリコンゴリラ！」
『カメレオン』を全滅させた相馬は駒場に向かってそう言った。
「やばっ！」
流田は焦った。うっかりしていた。駒場の潔白を相馬に証明するのをすっかり忘れていたのだ。
（マズい！速く止めねぇと・・・）
流田はすぐさま止めようと考えたが、

「果てろォォォオ！！」
遅かった。相馬の放った鞭が、
「うぎゃっ！！」
「あっ！！」
駒場を身を挺して守った流田の眼に、フレームだけで１０万円する高級眼鏡を吹き飛ばしながらクリーンヒットした。

「なるほど。つまりこの女の子は、フレメアちゃんと言って駒場サンが１ヶ月くらい前に無能力者狩りから助けた女の子でずっとかくまってたと。そして、駒場サンはロリコンではないと。そういうことっすね？」
「・・・１３回目の説明でようやく理解してくれたか」
駒場は相馬の理解力の無さにため息をついた。
「にしても可愛い子っすね。いや、俺は別にそういう趣味はないんすけど」
相馬は自分の膝の上で眠るフレメアの顔を見ながらそう言った。ちなみに現在二人は公園のベンチに座り、ソフトクリームを食べている。流田はといえば、相馬の鞭を食らい、
「目がぁ～！！目がぁ～！！」
と、某大佐のごとく目の痛みを訴えたため、『チーム』のメンバーの一人がバイトをする『ワグナリア学園都市店』にて相馬が貰ってきたお絞りを目の上に乗せて、日陰で休んでいる。
「どうしてこんな可愛い子が酷い目に逢わなきゃならないんすかね？」
相馬は駒場に尋ねた。
「無能力者狩りというのはそういう者を好んで狙うのだろう。尤も、俺が知ったところではないがな」
駒場は答えた。

「・・・何も知らずに、得物向けて本当にすいませんでした。アンタのこと勘違いして」
「気にするな。俺はスキルアウトだ。勘違いには慣れている。それに」
そう言って駒場は木陰で横たわってる人物を指して、
「お前が謝るべきは、俺よりも流田だろう・・・」
と指摘した。
「あはははは・・・」
頬をポリポリと掻いて相馬は苦笑した。
「まぁ、今度なんかあったら言って下さいよ。俺じゃ頼りにならないかもしれないっすけど、リーダーや流田さんならなんとかしてくれますし。俺もなんとかしようとはしますし」
相馬は言った。
「『チーム』のみんなはアンタみてぇなイイモンのスキルアウトが好きなんす。だから頼ってください」
相馬はそう言って明るい笑みを浮かべた。駒場も、
「・・・スキルアウトに良いも、悪いもないだろう」
と言いながらも、その強面な顔を優しくほころばせだ。流田は
「・・・お婆ちゃんが、お婆ちゃんが見える・・・・・・」
と、何かにうなされてそんなことを言った。

家康は深く辛そうな表情をした。まるで、
世界の全てに裏切られたかのような。そんな表情を浮かべる家康に対して、ロックゲートは
「・・・傷害罪の容疑でご同行願いますわ」
と蔑むように言った。そして、彼の手に手錠をかけようとした、その時だった。ロックゲートの体が、鈍い音と共に宙を舞った。拳に

よる一撃。放ったのは、
「数多！！」
木原であった。
「親友(ダチ)をボロクソ言われて黙ってられる程、木原数多は優しく出来ちゃいねぇんだよ！」
木原はそう言って眼前の少女を睨む。
「来いよ！クソ女ァ！！俺は今てめぇをムチャクチャ殺してぇ！！」
木原は剥き出しの殺意をロックゲートに向ける。猟犬部隊隊長の本物の殺意である。
「・・・公務執行妨害適用」
そう呟きながら崩れ落ちていた体を起こし、
「・・・切り捨てます」
刀の柄に触れ、剣術で言う居合い抜きの構えを取った。
「上等ォ！！拳でたっぷり沈めてやらァ！！」
木原はそう言って構えを取った。自らの持つ体術の奥義を放つ構えを。そして二人は、同時に地面を踏み切り飛び出した。勝負は一瞬。二人はそれぞれ達人。当たれば即死は免れない。そんな勝負を、
「「なっ！？」」
家康は止めた。ロックゲートの刀の柄に手を触れ、抜けないように押さえ、木原の拳を手首を掴んで止めた。
「てめェら、やめろよ」
家康はそう一言言った。
「けど・・・」
「数多てめェは俺の親友だ。ロックゲートもうざってぇが死んでほしいとまでは思わねぇ。俺としちゃ、どっちにも死んで欲しくなんかねぇし、どっちの敵にも回りたかねぇ」
その一言を聞いて、二人は背筋がぞっとした。殺意なんてものじゃない。もと底知れぬドス黒い恐怖だった。それは暗部に生きる人間としての感情を持ち合わせない研究者も、剣を極めた達人も、簡単に畏縮させた。

「つーわけで止めてくれ」
家康はそう言って微笑んだ。そのドス黒い恐怖が嘘かのように。木原と、ロックゲートは互いに殺意を向けあうのを止めた。
「さてと。んじゃ、行こうぜ、数多」
家康はそう言って木原を促した。

「お前、『百烈拳』使う気だったろ？」
家康は木原に尋ねた。『百烈拳』。木原数多が開発した独自の格闘術『木原真拳』の奥義の一つである。暗部で生きる為の彼なりの戦い方。聞くところによれば第一位にのみ有効な技も存在するらしい。
「・・・・・・」
木原は無言である。つまりはやるつもりだったということだ。
「まぁ、親友としちゃ嬉しい限りだが一般人（カタギ）にそれを放つんじゃねぇよ」
『百烈拳』は人を殺す部類の技だ。普通は一般人に放たない。放つならば死んでも文句は言えない、暗部に堕ちた人間だ。
「俺に撃たねぇことを選べる程、まともな人格と優しさがあると思ってんのか？」
木原はそう言って、自嘲の笑みを浮かべる。
「フン！」
家康はそう言って鼻で笑った。愚問だった。こんな自分のような能力者（ルモット）の為に全力で怒って、体を張れる人間のどこに優しさがないと言えるのだろうか？
（てめェのことは、誰より俺が分かってるぜ、親友）
家康はそう、心の隅で呟いた。
歪んだ二人は歪んだ街を歩いていた・・・

「さぁて！今日は飲むぜ！！」

「・・・自重しろよ、馬鹿多クン」

## 第五話　日常生活？（後書き）

キャラ紹介＆ａｍｐ；用語集

能理香＝ウェイル＝ロックゲート
ｃｖ平野綾
年齢１７歳
身長１６２ｃｍ
体重４７ｋｇ
所属　長点上機学園・風紀委員２０８支部
容姿　ウェーブのかかった金髪とエメラルドグリーンの瞳が特徴的な美少女
説明　愛と正義の風紀委員。剣の達人であり、帯刀が許されている。お嬢様風の言葉を使う。なお、本来風紀委員には逮捕・拘束の権限はない。何気に規則違反だったりする。自身のブログは人気が高く、学園都市において、ナンバー１のアクセス数を誇る。

籍弦太郎（せきげんたろう）
ｃｖ加瀬康之
年齢１７歳
身長１７２ｃｍ
体重５９ｋｇ
所属　有栖川工業高校　マシン科
概要　『チーム』内において、相馬に次ぐ馬鹿。三行以上の文章は読まない。工業高校に通うため、機械の扱いに長ける。なお、かなりのガンマニアで、エアガンやモデルガンをコレクションにしている。喧嘩や抗争になると、それを使い戦う。

神原詩音（かんばらしおん）

ｃｖ豊永利行
年齢１７歳
身長２１０ｃｍ
体重８８ｋｇ
所属　有栖川工業高校　デザイン科
概要　サヴァン症候群に犯されており、完全記憶能力を有する。サヴァンの影響か、口数が少なく、非常に端的にしか話さない。だが、そんな彼を『チーム』のメンバーは慕っている。弦太郎は無二の親友。自身の完全記憶能力を絵画においてフル活用している。芸術のセンスが桁外れており、常盤台の婚后氏が彼の絵に感動し、３００万程で買い取ったという伝説がある。

牛追い鞭
全国のＭ属性の方へ。鞭で叩かれたいと思ってはいけません。あれはシャレにならん痛さです（親戚に遊びで食らって痛かった）

ワグナリア学園都市店
北海道某所に存在するファミレス、ワグナリアの支店。店長は伊波さん（２５）である。また、相馬金太郎と、相馬博臣に関係性は全くない。

木原真拳
木原数多が編み出した無敵の拳法。銃を持った人間以外なら大抵は倒せる。また、「神拳」ではなく「真拳」である。

木原百烈拳
「アタタタタタ！！」ではなく、「オラオラオラオラオラ！！」と叫ぶ。

## 第六話　日常生活？（前書き）

すみません

予告より大分遅れてしまいました

# 第六話　日常生活？

スキルアウト以外の無能力者に対してかつあげをした。たったそれだけのことだ。それだけのことでスキルアウト『八汰烏』は壊滅した。

「シュー」という2つのスプレーの噴射する音が、しんと静まり返ったスキルアウト『八汰烏』の根城である廃屋に木霊した。殴り倒された少年達の山だけがあり、ただただ静かな空間にはその音は妙に不気味であった。

「おい、シヲン。この後何すりゃいい？」

籍弦太郎はオレンジ色のカラースプレーを噴射させながら、隣で自分と同じようにスプレーを噴射する神原シヲンに尋ねた。

「・・・赤、黒、緑」

神原は非常に端的に、壁の何ヶ所かを指差しながら色の名前だけを言った。つまり、その箇所を指定した色で塗れということだ。

「了解」

そう一言言って籍はスプレーを足もとに置かれた段ボールの中にしまい、別の色のカラースプレーをそこから取り出した。さて、一体彼らは、自分達が全滅させたスキルアウトのアジトで何をやっているのだろうか？その答えは、その様子を見て誰もが思うこと。落書きである。しかし、クオリティについては、不良の落書きとは言い難い代物だった。巷で不良の落書きといえば、大人を小馬鹿にしたような、意味の分からない主張が成されたパステルカラーのポップ調の絵を思い浮かべるだろう。だが、この落書きはそのようなものとはかけ離れていた。例えるなら、ヨーロッパの歴史ある大聖堂にある、天界を描いた絵画。ルネサンス時代の絵画を思わせる、見る者に感動すら覚えさせる一枚の芸術。

「『スキルアウト』や『無能力者狩り』を倒す度、その現場に十字教をテーマにした落書きを残す」
籍の『なんとなくかっこいい』というふざけた理由で始まったそれは、二人の習慣、いや、最早習性になっていた。尤も、籍の思いつきで始まった癖に、絵のデザイン、配色、その他諸々を決めるのが神原だったりとおかしな点が幾つもあったりする。まぁ、神原は工業高校のデザイン科に通い、自身の絵が常盤台のお嬢様に３００万円という破格で買い取られたことがある等、抜群の芸術センスがあるため当然といえば当然だが。
ちなみに、何故テーマが十字教なのかは、彼らが所属するスキルアウト『チーム』のリーダー『阿頼耶家康』が、イギリス清教派の十字教信者だからである。
「つーか似合わねぇよな。チームのリーダーで暴虐不人のあの人が、敬虔なる十字教信者サマなんてよぉ」
籍弦太郎はそう皮肉った。神原も、
「・・・かもしれない」
と、その意見を否定出来なかった。
「でも・・・リーダーの祈る姿、本物」
しかし、神原はそう言う。
「リーダー、僕達、為、祈ってる。その姿、神父さん、変わらない」
「そうだな」
神原の必死の発言に、籍は同意し微笑む。

阿頼耶家康はクリスチャンだ。
しかも、かなり熱心である。
所有する聖書は至る所にマーカーが引かれ、ページには付箋だらけだ。朝は寝過ごさない限り（意外かもしれないが、家康は滅多に寝過ごさない。あまり学校に行かないのに、深夜１：００に寝て朝６：００に起きるスタイルを基本的に崩さない）毎朝の偶像崇拝を欠かさない。クリスマスや、イースター、アバドンといった宗教行事の

時は讃美歌を唄う。日常的にも、口ずさむ曲や鼻歌が、アニソンかボカロかV系か讃美歌に限られていたりする。これを聞けば大抵のスキルアウトは笑い出す。（現に浜面仕上というスキルアウトが笑い出し、チームの切り込み隊長、相馬金太郎の牛追い鞭を食らって死にかけた）

というより、スキルアウトに限らず、科学によってあらゆるオカルトが否定しつくされた学園都市においては誰もが笑い出す。この街においては、特定の宗教を信仰している者はその時点で既に異端者なのだ。それにスキルアウトのリーダー、学園都市レベル５の第六位という立場がさらに拍車をかけているのだ。

「・・・知らない。リーダー、祈るわけ。神様、信仰するわけ、みんな知らない」

神原は言った。必死に。必死過ぎる程、必死に。彼はサヴァン症候群に生まれながらに犯されており、その弊害で言語機能に障害が出ており、端的にしか話せない。その上、それが原因で幼少期にイジメを受け、トラウマになり、言葉数自体が少なく、内気で滅多に話さない。そんな彼が、言葉を、ムキになって紡いでいる。リーダーの為に。かつて流田薫之丞がリーダーを務め、『憤怒の雷神（ラース・オーガ）』と名乗った組織を今の『チーム』に変えてくれた阿頼耶家康の為に。神原の気持ちは籍にも痛い程よく分かった。自分も家康には、この世界のどんな言葉を星の数程使っても、伝えられない程に感謝しているのだから―。だから籍は、ガラにもないくらい笑ってこう言った。

「だったらさ、分かって貰えるように、落書き頑張ろうぜ」

と。

「こんなつまんねぇことでもさ、もしかしたらリーダーのことが伝わるかもしれないじゃん？だからさ、頑張ろうぜ！」

内心、本気で自分が言うには似合わない台詞だと、籍は思った。しかし、それでも、

「うん！！」

と神原は笑って同意してくれた。二人の、スキルアウトと呼ばれ、

学園都市からはノケモノとされる少年の純粋な思い。それを、
「フフフ。美しきかな友情かしらぁ～？」
明らかに嘲る声がした。いきなりの声に後ろを振り返る二人。そこにいたのは一人の少女だった。顔の右半分を覆い隠す長い前髪が特徴的な紅蓮に燃えるロングヘアーの、少し冷めた印象を与える１７歳くらいの美少女。いや、彼女の場合は美貌の女性と表現した方が適切だった。そんな印象を受ける少女だったが、その全てを彼女が出す、人間とは思えないような、吐き気を催す程の不気味さが、恐ろしさが、全てを台無しにしていた。
「何なんだてめぇは！？」
と、籍は怒号にも似た尋ね方をした。すると、赤髪女は
「これを見れば一発かしらぁ～？」
と、自分の右肩に付けられた腕章を見せ付けた。それは飾り気がまるでなく、中学生の委員会のようで、その役職の重大さがまるで現れていなかった。しかし、それにはこう書かれていた。
『風紀委員長（ロウガーディアン）』と。
「なっ！？風紀委員長だと！？レベル５に次ぐ学園都市の最高クラスの戦力がどうしてここに！？」
籍は驚きを隠せなかった。

『風紀委員長』ー
それは全風紀委員の中で最も検挙率が高く、全風紀委員の中で最も長い時間働き、最も強い五人に与えられる称号である。風紀委員長全員はレベル５に近い実力を持ったレベル４の能力者であり、本来通常の風紀委員には認められていない、犯人の逮捕・拘束及び、攻撃、場合によっては殺害が認められ、風紀委員、警備員の統治が可能である、実質レベル５以外のもう一つの最高戦力である。
「フフフフフ。私が有名人だからって緊張しなくてもいいのよ？」
自分達でも気がつかないウチに身体を震わせていた二人を嘲笑う風

紀委員長の赤髪女。
「私の名前は毒島可憐。なんでこんな所にいるのかかぁ・・・そうだなぁ・・・」
自己紹介をして、あまりにワザとらしく考えるふりをする毒島と名乗った風紀委員長。
「ねぇ、八汰烏って知ってる？最近幅を利かせてるスキルアウトなんだけどさぁ。私はね、それを『消し』にきたの」
まるで最新作のゲームを親に買って貰い、それを自慢するような口振りで。ただし、話の内容は二人を驚愕させるのに十分すぎるものだった。
「なっ！？」
「消しに来ただと！？」
二人の蒼白となった表情をみて、
「まぁ、アナタ達に先を越されてしまったけど」
と毒島は付け足し、さらにクスクスと笑い出す。
「私はね、スキルアウトが憎くて、憎くて、憎くて、溜まらないの。だから、趣味でね、よく『消す』の」
平然と、寧ろ楽しそうに風紀委員長の少女は言ってのけた。言ってしまった。
「・・・ふざけるな」
「・・・趣味で消すだと！？てめぇ、スキルアウトをなんだと思ってやがる！？」
激昂する二人。だが、毒島はそれに対して、
「そうねぇ。害悪細菌ってとこかしらぁ！？」
さらに焚き付けるような台詞を吐いた。
「「殺す！！」」
この瞬間、籍弦太郎と神原シヲンは彼女の敵となった。籍は懐に隠していた致死性のエアガンの銃口を毒島に向け、神原は両手にメリケンサックを装着し、ボクシングの構えを取る。
「・・・フフフ。『チーム』のメンバーの中で俗に『五亡星』と呼

ばれる人達、籍弦太郎に神原シヲンかぁ・・・まぁ、暇つぶしには丁度良いかしらぁ～！？」
毒島はその瞬間、両腕を左右に大きく開き、右に緑、左に藍の炎を作り出した。不気味に佇む姿は、まるで道化役者の用だった。糸くりで動く、愚かで、それでいて、おぞましい人形仕掛けの道化師だ。
「いいわ！！消してあげる！！八汰烏の代わりにねぇ！！」
毒島は叫んだ。狂ったようにケタケタと笑いながら。
「ハン！！言ってろ！！てめぇが喧嘩売ってんのは、学園都市史上最低最悪最強のスキルアウトだ！！せいぜい後悔しやがれ！！」
籍はそう叫び返した。

そして次の瞬間、惨劇は幕を上げる・・・

「やりすぎですよ、毒島さん」
惨劇が終わった舞台に立つ毒島に、同じ風紀委員長の一人、時雨沢彼方はそう率直な意見を漏らした。
「フフフ。何言ってるのかしらぁ～！？」
毒島は時雨沢を、首だけ振り返り睨み付けた。
「・・・この二人のことについてでございます」
時雨沢はまるでボロ雑巾のようになった、籍と神原を見て言った。よく確認すると籍は刀のようなもので体を滅多斬りにされ、神原は毒か何かを吸い込んだのか、身体中に紫色の斑点を作り白目を向いて、血を吐き出していた。
「・・・まったく。恐ろしい力ですよ、貴女の苦痛炎獄（ペインフレイム）は」
惨状を見ながら時雨沢は忌々し気に言った。
「・・・だが、いくらなんでもやはり、やりすぎですよ。彼らはスキルアウトとは言え修正の余地が十分ございました。もし死んだらどうするのですか？確かに風紀委員長には殺害の権限がありますが、」
その言葉に、

「フフフフ」
といつも通り不適に笑う。
「愚問ね、彼方。スキルアウトの時点で修正なんて効かないわ。スキルアウトは所詮はどこまで言っても害悪なんだから」
彼女の口振りはどこまでも冷淡だった。心の底からスキルアウトを嫌っていることが誰しもに分かるほどであった。
「それにね、私がスキルアウトに死なんていう安らかなもの、与えると思って？」
毒島はそうニタリと笑って言った。
「良い？スキルアウトが味わうべきはね、地獄なの。そして、地獄は決して死と同義語でないの」
まるで哲学者のような口振りで語る毒島は、長い前髪をかき上げ、隠れていた顔の右半分を見せ、
「だって地獄があるのはこの世なんだからぁ」
と語った。顔の右半分は形容出来ない程、火傷でただれ醜くかった。左半分が美しいだけにそれが余計に際立ってしまっている。
「苦痛。悲鳴。恐怖。失望。無念。痛み。裏切り・・・とにかく沢山の負の感情だけの世界。それが地獄よ。全てのスキルアウトは一人残らずそこに堕ちるべきかしらぁ！？」
毒島の姓に恥じない毒のように醜悪で、可憐からは程遠い理論だった。
「それにね、私はね風紀委員長なんてどうでもいいの。スキルアウトを地獄に堕とすならどこでもいいの。だから、私は、ウグッ！！」
その時毒島の言葉は遮られた。地面からいきなり生えてきたつる。それによって五体が引きちぎれるほどに身体中を締め付けられているのだ。
「あまり調子に乗らないで下さいませ。毒島さん」
それをおこなったのは時雨沢であった。
「確かに貴女の苦痛炎獄は強力ですが、今の私の敵ではありません」
そう言った瞬間、時雨沢の姿は消え、かと思うと彼女を囲むように

四人の時雨沢が現れて、それぞれが剣を持って、毒島の首にそれを突きつけた。
「くっ、幻想御手の力でレベル5に慣れたからって調子に乗るんじゃ・・・ウグッ！！」
途端につるの締め付ける力が強くなる。
「あまり下手なことを言わない方が宜しいですよ。私の幻想現実（イマジンリアリティ）は最早現実でございます」
と、時雨沢は毒島に対して冷たく吐き捨てた。
「・・・最も貴女には第四位を消すという役割がございますので、ここで死なれては困るのですが」
と時雨沢はため息を漏らした。
「・・・どうぞ、計画完成までにそのねじ曲がり過ぎたせいかくを直して下さいませ。貴女の行いは風紀委員長という地位に泥を塗り、風紀委員長を否定する、万死に当たる行為なのですから。」
その瞬間、つるが最初からなかったかのように消え、四人の時雨沢も同時に消えた。時雨沢本人ですらも・・・
「限りなくリアリティのある幻覚を作り出す力、幻想現実・・・」
毒島は彼の能力と共に再確認した。
「忌々しい、執事見習いがァ！！」
そう唸るように、呻くように叫び、鉄で出来た工場の壁を言葉通り忌々し気に殴りつけた。ゴン！！という音と共に、手から鮮血が滴落ちた。

## 第六話　日常生活？（後書き）

毒島可憐

ＣＶ．田中理恵

能力名　苦痛炎獄（ペインフレイム）

今はこれだけしか語れません

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8846v/

---

とある力学の圧殺空間

2011年10月17日03時56分発行